

ナチ人種主義再考

——一九四二年九月一六日のヒムラーの演説を読む——

山本 秀行

はじめに

第一章 ヒムラーによる戦争の意義の再構築

一 ヒムラーの視線

二 「アジア」の脅威への対処

三 「大ゲルマン帝国」の建設

第二章 ナチズムと東方

一 東方という舞台

二 子どもの回収とその論理

三 ヒムラーのこだわり

第三章 世界戦争の時代の人口問題と人種主義
おわりに

はじめに

一九四二年九月一六日、ナチスの親衛隊を率いるハインリヒ・ヒムラーは、ウクライナのヘーゲヴァルトで、親衛隊幹部を集めて演説をおこなった。

ちょうどその二カ月前の七月一六日、ヒトラーはドイツ軍の夏季攻勢にあわせて、本営を前線に近いウクライナのヴィニツァに移した。これにあわせてナチ体制指導部もヒトラーの本営の近くに前線本営をおく。陸軍最高司令部はヴィニツァの大学街に、ヒトラーの本営の近くにはナチ党指導部の前線本営が設けられた。ゲーリングはコロステンに、ヒムラーは総統本営から北に約三〇キロメートル離れたヘーゲヴァルトに、それぞれ本営を設置した。^①九月一六日の演説は、このヒムラーの本営で開催されたロシア南部親衛隊・警察指導者会議で行われたものである。演説の時間は二時間が予定されていて、かなり長い演説であった。

ヒムラーは、一九二五年から四五年までに、記録に残るものだけでも約一三二回の演説を行っている。そのうち七五の演説が完全な写しか録音の形で残っているとされる。^②ヒムラーは、仲間内で行った秘密演説では、おどろくほど率直に機密事項を口に出している。ポーランド指導部の組織的殺害や、^③親衛隊がユダヤ人問題の解決に中心となって働いたと語る部分^④がそれである。たとえば一九四三年一〇月四日、ポーゼンでの演説のなかで、ヒムラーは、「ユダヤ人の疎開、すなわちユダヤ民族の根絶」と述べ、「疎開」というナチスの偽装語の意味するところを暴露しているだけでなく、親衛隊がその「つらい任務」を遂行していることもはっきりと語っている。^④このポーゼンでの演説は、公刊されたニルンベルク裁判の史料集に採録されている。しかし、ここでとりあげる一九四二年九月一六日のヘーゲヴァルト演説は、ナチ犯罪を裁いた国際軍事法廷の史料集にも、戦後、研究者によって編纂された『ヒムラー秘密演説集』にも登場しない。^⑤

筆者がこの演説に注目したのは、「清潔」という言葉を軸に、ドイツのナショナル・アイデンティティを考えていたと

きである。ヒムラーは、この演説のなかで、居並ぶ親衛隊の幹部をまえに、じつにこまかいところまで指示している。たとえばこうである。部下が髭を剃っているかどうか注意せよ、くしゃくしゃのベッドを見つけたら、すぐに、片づけるようにいいたまえ。食卓につくときには、きちんとした服装をするようにいおう。下着を点検し、汚れていたら、その場で、なぜまだ洗濯しないかと問いたださなくてはならないなどと。あのナチ親衛隊のトップに立つ人物なのに、その指示はこまかく、具体的である。さらにヒムラーは、兵舎や駐屯地は、ハエやシラミなど害虫を徹底的に駆除し、排水設備を整備しなければならぬとも述べている。もともと几帳面なヒムラーとはいえ、なぜ、それほど整理整頓や清潔さに気をくばらなければならないのだろうか。⁽⁶⁾

ヒムラーはまた、この演説のなかで、ドイツが占領した東方領域への大規模な入植構想を語るとともに、四万三〇〇〇人の民族ドイツ人をヘーゲヴァルトと、コロステン、ヴィニツァに入植させる命令をだしたことを明らかにしている。さらに興味深いことには、独ソ開戦から一年以上がたち、ドイツ人兵士と現地ロシア人女性とのあいだに生まれた子どもが、数十万から一〇〇万人になるであろうと述べている。この数字は誇大にすぎるだろうが、問題は、ヒムラーが、そうした子どもたちを、場合によっては「奪い」、「盗んで」でも、ドイツにつれ帰って、ドイツ人として育てねばならないと力をこめて語っているところである。ナチスがアーリア人やゲルマン人の至上主義をとまえ、スラヴ民族を劣等視していたことは、よく知られたことである。ヒトラーは『わが闘争』のなかで、ドイツ人の血のなかにユダヤ人など「劣等民族」の血が入りこむことで、ドイツ人の能力が劣化し、退化していくことへの恐れを、くりかえし述べている。ところが、ヒトラーの腹心の部下であるヒムラーは、子どもだけでなく、場合によってはその母親もドイツにつれていくといっている。ヒムラーの演説は、われわれのもつナチ人種主義のイメージとすこし矛盾しているように思えないだろうか。

このほかにも、ヒムラーは、「大ゲルマン帝国」の創建を宣言したり、アッティラやチンギス・ハン、レーニン、スターリンのような指導者が誕生したのは、アジア諸民族の血と北方系の血が出あったからであると語ったり、中国の儒教

をひきあいにして、ドイツもキリスト教ではなく祖先崇拜を復活させなければならぬと述べたりしている。こうした話題が冗談でないとするれば、これらのあいだにはどのような整合性があるのだろうか。

そもそもこの演説の最大の特徴は、ユダヤ人の不在にある。正確に言えば、「ユダヤ人」という名詞と形容詞は全部で三回ほど登場するが、いずれもついでにあげたという印象が強く、脇役にとどまっている。かわりに目につくのが「アジア」という言葉で、これは七回登場し、中心的な意味を担っているように思われる。

これまでこの一九四二年九月一六日のヘーゲヴァルト演説については、個別研究のなかで、関連する部分がとりあげられることはあっても、この演説そのものがテーマ化されることはなかったように思われる。しかし、ナチズム研究にとって貴重な史料である『ヒムラーの業務予定表』⁽⁹⁾によれば、ヒムラーはこの演説を重視していたと考えてよいようである。それは、ヒムラーの個人秘書のブランドが、速記録からこの演説を書き写すのに、ヒムラーが何回も修正するので、何日もかかったと注記されているからである。それだけヒムラーはこの演説には思い入れがあったと考えられる。

本稿の課題は二つある。第一に、このヘーゲヴァルト演説を全体としてとらえてみることである。そのことで浮上してくるのはなにか。それをつうじて、ヒムラーがこの演説を重視した理由を考えてみることである。第二に、ユダヤ人が登場しないこの演説を、ナチスの人種主義について考える手がかりとすることである。

ユダヤ人問題がナチスの人種主義の重要な部分を形成していることはたしかである。しかし、ユダヤ人以外の要素に注目することで、ナチスの人種主義の特徴がすこしでも明らかにならぬであろうか。そのことによって、ナチスがなぜそれほどユダヤ人にこだわったのかという問題も、みえてくるのではないだろうか。

ヒムラーはこのヘーゲヴァルトでの演説の翌日、九月一七日に、ヒトラーと面談することになっていた。ヒトラーの都合で面談が実現したのは九月二二日であるが、ヒムラーの上申用のメモが残されている。このメモは、ヘーゲヴァルト演説の内容を補足するものとして興味深いので、まずここに史料として掲載しておくことにする。

史料 1 ヒムラーの一九四二年九月二日ヒトラーへの上申事項メモ

出典 『ヒムラーの業務予定表』五六三―五六八頁（註一一参照）

凡例

- ① 項目の下にある（済）は、協議したことを確認するチェック
② 「」内は筆者の注記

- I 昇任と任命
- II 武装親衛隊
- III 防空
- IV 民族と入植
1. ユダヤ人の移住（済）
今後はどのようにすすめるか。
2. ルブリンへの入植 総督府の状況について、グロボチュニク
ロートリンゲン人
ボスニアからのドイツ人
ベッサラビア人
3. クリミアへの入植
- a. 気候と健康

b. ゲルマン系ゴート人、入植にはまだ同意していない。南ティロール人も同様。

c. 民族ドイツ人 トランスニストリアから 一三万人

ハルプシュタット 四万人

コリツカ 一万五〇〇〇人

d. クリミア入植へのより明確な命令 「横線で消されている」

4. ロシアにおける「国防軍関係者の」非嫡出子の捕捉 (済)

a. 軍の上官への届け出

b. 警察の窓口での捕捉

c. 母親への月々の手当

V 雑件

VI サボタージュと匪賊戦争

1. 総統指令第四六号「一九四二年八月一八日の「東部正面の匪賊取締の強化」指令」の効果 (済)

2. フォン・デア・バッハツェレウスキへの任務 (済)

ダリユーゲの解任 一九四三年四月／五月以降

3. 敵のサボタージュ手段の図表集 (済)

4. ドイツ人常習犯罪者の処刑への許可 (済)

5. ドイツ人四万三〇〇〇人の入植 (済)

コロステン 「ゲーリングの本営周辺」

ヘーゲヴァルト (ジトミル) 「ヒムラーの本営周辺」

ヴェーアヴォルフ

「ヒトラーの本営 ヴィニツァ北部」

「ヘーゲヴァルト演説で発表された民族ドイツ人四万三〇〇〇人の入植が、IV民族と入植ではなく、VIサボタージュと匪賊戦争にあるのは、バルチザンからの攻撃にたいする防御措置という意味があると思われる」

6. 一九四二年七月ゲルマン義勇兵の手紙（済）

第一章 ヒムラーによる戦争の意義の再構築

一 ヒムラーの視線

ヒムラーは、一九四二年九月一六日、ヘーゲヴァルトでの演説をこうはじめた。

一〇年前には、われわれが親衛隊指導者会議を、今日、ヘーゲヴァルトと呼ばれるところで、すなわち住民の大部分がユダヤ人であったかつてのロシア都市ジトーミル近郊で、開催するようになるとは、まったく夢にも思わなかったことである。「中略」

われわれはいまだになお、ロシアにおいて大規模な軍事的、兵士的格闘の最中にある。この戦いはたいへん厳しい。そのことは、このロシアにはまりこんでいる諸君が一番よく知っていることである。今年もまたかなりの領土をわが方に獲得した。これからの数カ月でもっと征服するであろう。われわれは、この巨大な国家に軍事面、人員面、装備面でふたたび打撃をあたえた。来年には、残っているロシアのヨーロッパ部分を完全に打倒できるだろう。ロシア人はこれまでで、またこの戦争でも、一番の手ごわい敵である。このことを疑う兵士は、ひとりもないである

う。またロシア人はけつして降伏しないという点でも、みな一致している。このまったくの肉弾戦は本当に厳しい。これからもこの厳しい月日が、数カ月、半年、一年、いや数年も待ちうけているであろう。いつかこの戦争は、三年、四年、五年つづいたと、そつげなく歴史に書かれるようになるだろう。第一次世界大戦がそうだったように、第二次世界大戦と語られるようになるだろう。この数カ月、この数年、われわれが直面してきた憂慮や、流した血や、責任のことなどは、とくに総統が双肩に担ったことなどは、忘れられ、言及されなくなるだろう。最後にわれわれのあげた成果が記録される。戦後、歴史にはこう記されるであろう。大ゲルマン帝国が、とくにこの東方をつつみこんで、創建された⁽¹²⁾と。

演説がおこなわれた一九四二年九月一日は、ドイツがポーランドに侵攻した一九三九年九月一日から約三年が経過した節目にあたる時点である。対ソ開戦からは四五二日目にあたり、一九四二年六月二八日に起死回生の「青」作戦を開始してからは、二カ月半になる。ヒムラーが節目を意識していたかどうかはわからない。ただ、ヒムラーの視線を追うと、この戦争が三つの方向から、過去と現在と未来から位置づけられていることがわかる。

「一〇年前には、・・・まったく夢にも思わなかったことである」と、ヒムラーはまず過去にたちかえって、この戦争をとらえなおそうとしている。ナチスが政権についたのが一九三三年の一月であるから、一〇年前といえば、ちょうどその前後の時期にあたる。当時からすれば、ナチスがソ連に深く攻めこんで、ドイツから一五〇〇キロメートルも離れた「ユダヤ都市」近郊に本営をおき、一二〇〇キロメートル先にあるカフカースの油田地帯も手にしようとしていることなど、まさに夢にも思わなかったにちがいない。よくぞここまで来たという感慨、達成感がうかがえる。

たしかに一九四二年の夏は、ナチ第三帝国の絶頂期であった。ドイツ軍はどの戦線でも勝利していた。ヒトラーの作戦指令書からは、ドイツ軍が一九四二年中に究極の勝利をめざしていたことがうかがえる⁽¹³⁾。このころ「ヨーロッパ新体制」

とか「新秩序」、「新しいヨーロッパ」などという言葉が、浮上してくる。⁽¹⁴⁾ ヒトラーは、一九四二年六月二九日、夏季大攻勢「青」作戦を開始したその翌日、ヒムラーをまじえた会話のなかで、ヒトラーが「みずからなしとげなければならなかった困難な歴史的事業」について語り、「いまや完成しつつあるヨーロッパの統一」のために払った膨大な犠牲のことは、後の世代では、すぐに忘れられると述べている。⁽¹⁵⁾ ヒムラーも、七月一九日に、「一九四二年一月三十一日までにポーランド総督府のユダヤ人全員の再移送〔殺害〕」を完了するように命令した文書のなかで、「この措置は、ヨーロッパ新体制に必要な人種と民族による住民集団の分割と、ドイツ本国とその勢力圏の治安と浄化のために必要とされるものである」⁽¹⁶⁾と述べ、「ヨーロッパ新体制」に言及している。

しかし、九月になると、こうした楽観論にもかげりがでてくる。⁽¹⁷⁾ ヘーゲヴァルトの演説でヒムラーは、ドイツ軍がロシア軍の頑強な抵抗に苦戦していることを率直に認め、いまの現場からの視点でこの戦争をとらえなおしている。この演説でヒムラーが強調しているのは、指揮官たちに、現場を直接、自分の目でみよ。少なくとも毎月十回の視察をおこない、部下たちの様子に気を配れ。決定は書類机の上ではなく、現場でおこなえ、という点である。⁽¹⁸⁾ 先にあげた「清潔」という問題も、この現場からの視点とかかわっている。現場の視点からすると、この戦争は、まだ「数カ月、半年、一年、いや数年も」続きそうなので、いかに部下たちに戦争の意義を説明し、士気を維持するかが重要になる。「部下たちは、知りがたがるだろう。むこうの前線はどうなっているのか。なぜ戦わなければならないのか。部下たちは、アジアの問題について知りがたがるだろう。それを諸君は説明しなければならぬ。そうすれば、部下はこういだろう。そのとおりだ。自分には妻と四人の子どもがいる。やがてここに一五〇から二〇〇モルゲンの土地をもてるだろう。息子のゼツペとハンスは、いつか自分の農場をもてるだろう。この土地はすばらしい」と。⁽¹⁹⁾

現場への視線から転じて、「いつかこの戦争は、……第二次世界大戦と語られるようになるだろう」と語るヒムラーの

視線は、未来からのものである。戦争のために払った膨大な犠牲のことなどすっかり忘れさられた未来からの視点を借りて、ヒムラーはこの戦争の歴史に残る意義を「大ゲルマン帝国の創建」に求めている。ドイツが主導権を握る「ヨーロッパ新体制」を、ヒムラーは「大ゲルマン帝国」ととらえなおしているわけである。

こうしてヒムラーの視線をたどってゆくと、このヘーゲヴァルト演説は、ポーランド侵略からはじまるナチズムの戦争の意義を、あらためて再構築しようとしたのではないか、という論点が浮上してきた。そこで、ヒムラーが部下たちに語り聞かせるべきとするこの戦争の意義について少しみておこう。

二 「アジア」の脅威への対処

ヒムラーが、部下の士気を高めるために有効と考えていたのは、戦争に勝てばこの肥沃なウクライナをドイツの植民地にして、兵士や農民たちは広大な農場を手に入れることができるというものであった。ヒムラーにとっては、領土の拡大と入植地の確保が戦争の重要な目的であり、意義である。もともと東部戦線に動員されているドイツ軍や親衛隊員は、みながみな農民家族の出身だったわけではない。分け前としての土地と農場はどれほど魅力があったのだろうか。国防軍や民政府、親衛隊は占領地の奪いあいをしてきたが、一九四三年夏に国防軍が実施したある調査によれば、戦後ウクライナへの入植を希望する者はたった二七三人だったとされる⁽²⁰⁾。

しかしここで注目したいのは、「部下たちは、アジアの問題について知りたがるだろう。それを諸君は説明しなければならぬ。そうすれば、……」という部分である。アジアの問題とはなにか。なぜアジアの問題が、ウクライナでの農場獲得と結びつくのだろうか。

ヒムラーは、演説の導入部分につづけて、こう語っている。

諸君は、村々で出あう女性二人にひとり、三人にひとり妊娠していることに、気がつくであろう。「中略」諸君は、われわれがここロシアでは、あらゆる戦争のなかでもっとも厳しい戦争、すなわちこの全アジア大陸の前地との戦争に直面しているという事実を心にとめなければならぬ。ここでは二億人のロシア人が相手なのである。ロシア人は、毎年二〇〇万人ずつ増加し、今日も増加しつづけている。しかも明らかにここ二〇〇二五年の飢えや、困苦、貧困にもかかわらず、彼らが増加していることに目をむけなければならぬ。レーニンやスターリンなどの独裁的な権力者や、ユダヤ人は、みなアジア人との典型的な混血であるからだ。かれらは、軍需能力と世界征服に狙いをつけている。諸君はこのことをけっして忘れてはならない。諸君は、いつもこのことを思いだして、絶対に方向性を見失わないようにし、なぜ自分たちがここに置かれているのかを認識しなければならぬ。⁽²¹⁾

この文章では、第一に、ロシア人の出生力の高さ、巨大な人口とその圧力がドイツにたいする脅威として指摘されている。第二に、ボリシェヴィキ指導部とユダヤ人、すなわちナチズムの敵はいずれも「アジア人との混血」とされ、ソ連とアジアが結びつけられている。これにつづく部分を読むと、その意図はもっとはっきりする。

「もしあのスターリンがロシアでなく、中国や日本に生まれ、蒋介石に代わって、二億人ではなく、四億五〇〇〇万人の人間を組織して、他のアジアの大衆とともに、われわれに立ち向かったとしたら、どうなるだろう⁽²²⁾。あのアツティラも、こうした何百万人という下等人間のどつ煮のなかから生まれてきたように、あるとき、こうしたどつ煮のなかになされていた「指導力と組織力をもつ北方系—ゲルマン系—アリア系」の血の一部がでて、第二のアツティラ、チングス・ハン、チムール、スターリンがでてこないともかぎらない。「もしアドルフ・ヒトラーが同じ時代に生まれていなかったら、白人種の側がどんなひどい目にあっていたか、肝に銘じておこう⁽²³⁾」。

ドイツが戦っているロシアは、全アジア大陸の先兵と位置づけられている。ヒムラーによれば、ロシアとの戦いはアジ

アの脅威との戦いでもある。アジアの脅威としては、フン族やモンゴルなどアジア諸民族によってくりかえされてきたヨーロッパ侵攻や世界征服の歴史があげられている。さらにここで強調されているのは、ロシアそしてアジアの人口のほうもない大きさ、出生力の高さ、人口圧力である。「アジアの問題」とは、ロシア⇨アジアの巨大な人口圧力であろう。いまはたまたまヒトラーという指導者にめぐまれたので、ドイツはアジアをおしかえすことができたが、将来、アジアと対決するときがくるであろう。そのときまでに、アジアに対抗するためには、ドイツが広大なロシアを植民地化し、ゲルマン人を入植させて、そこをゲルマン系の子孫を増やしていく人種育種場とする必要があるというものである。

この演説ではロシア人は、ユダヤ人とともに、「アジア人との混血」とされる。ロシアはアジアと結びつけられ、生物学的、人種的にとらえられ、アジアのイメージがロシアに投影されている。ロシアのアジア化である。ところがアッティラや、レーニン、スターリンのような指導者たちには「北方系—ゲルマン系—アリア系」の血が流れていることもほめかされている。ここでは、北方系とゲルマン系、それにアリア系が等置されている。またフン族のアッティラにゲルマンの血が流れているというのは、すこし奇妙な感じがしないだろうか。ドイツ人兵士とロシア人女性のあいだに生まれた子どもを、ドイツにつれ帰り、ドイツ人として育てるといふ問題といい、こうしたちょっとした違和感を目をむけることで、ナチスの人種論の特徴がみえてくるかもしれない。

ところで、現場の部下たちにもっと気を配らなければならないというヒムラーの演説を読んでいくと、ロシア化という表現にたどりつく。

ここロシアは、「ヨーロッパ人をたいへん墮落させる」ところである。孤独、アルコール、そして女性がここロシアでは、ほとんどいつもヨーロッパ人を飲みこんでしまう。「ロシア化」するとは、ここの慣習になれてしまつて、日に煙草を六〇本も、七〇本も、八〇本も吸い、シユナプス「アルコール度の高い蒸留酒」を水のようにがぶ飲みする者で、今日

ではなくて、明日にまわせばいい、という者である。「汚れを気にしなくなり、しだいに投げやりになる者である」。そうした者は、「もうドイツ人ではない。ロシア化しているのだ²⁴」という。

ロシアは不潔で不衛生、無気力、無規律な世界とされ、文明からとりのこされた、後進的で、野蛮な人びとの住むところとされる。文明と野蛮、清潔と不潔、ドイツとロシア、ヨーロッパとアジアが対比され、図式化されている。先にあげた「清潔」という問題も、ロシアをアジア化する回路ととらえなおすことができる。ロシアはアジアの一部であり、アジアの先兵である。アジアをひきあいによつて、この戦争は、アジアにたいするヨーロッパの防衛戦争となり、ドイツはその先頭にたつて戦っているのであるという正当化が可能になるのである。ヒムラーがあれほど「清潔」にこだわったのは、ドイツ人が清潔好きであるからというよりも、清潔こそが、ドイツ人兵士がこの戦争の意義を確認し、正当化するための回路であると考えたからではないだろうか。ロシア人を不潔で野蛮であるとするために、ドイツ人はあくまで清潔でなくてはならなかつたのである⁽²⁵⁾。

ロシアの征服がまぢかにみえたとき、ヒムラーは戦争の意味と目的をそれにあわせて再構築した。そのさいの構造化のひとつの核となつたのが「アジア」であり、アジアの脅威への対処であつた。これまでこの戦争に火をつけ、戦争の背後で糸をひいているとされてきたユダヤ人は、ここではアジアにその座をゆずりわたしている。

三 「大ゲルマン帝国」の建設

ヒムラーがこの戦争の意義としてあげる「大ゲルマン帝国」とはなんであるろうか。

ヒムラーの演説を調べていくと、一九三八年十一月八日の親衛隊幹部をまえにした演説の結びに「大ゲルマン帝国」という言葉が登場する。

「ドイツの行く手にあるのは、大ゲルマン帝国 [das großgermanische Imperium] か、無かのいずれでしかない。わ

れわれ親衛隊がその責務をはたせば、総統はこの大ゲルマン帝国 [das großgermanische Imperium]、すなわち大ゲルマン・ライヒ [das großgermanische Reich] を創造されるであろう。人類と世界がまだかつて経験したこともないような最大のライヒである」⁽²⁶⁾。

演説がおこなわれた一九三八年は、オーストリア併合があり、ズデーテン問題をめぐってミュンヘン会談が開かれた年である。いいかえれば、ナチスがヴェルサイユ体制の枠組みを越えることで、戦争の危機が現実化した年である。このオーストリア併合とチェコ危機の二回にわたり、親衛隊の特務部隊に動員令がだされたが、この特務部隊の将兵には、二人の外国人がくわわっていた。スイス人、デンマーク人、バルト人、ジーベンビュルゲンとポーランドからのドイツ人がそれである⁽²⁷⁾。また、ヒトラーは八月一七日にこの特務部隊を国防軍と同格の武装組織（武装親衛隊）とする秘密指令をだしている⁽²⁸⁾。

戦争を強く意識したヒムラーのこの演説は、興味深い内容をふくんでいるので、すこし長くなるが引用しておこう。

今後一〇年以内に、われわれはこれまでに例のない、重大な対立に直面することを覚悟していなければならない。それはたんなる国家間の戦いだけではない。国家は敵方から口実としてもちだされる場合もあるが、この対立は、世界のユダヤ人、フリーメイソン、マルクス主義者、教会勢力全体にたいする世界観の戦いでもある。こうした諸勢力は、なかでもユダヤ人は、あらゆる否定的なことの大本とであり、推進者であるとわたしは考えている。かれらはドイツとイタリアが絶滅されるのでなかったら、絶滅されるのは自分たちのほうであるということに覚悟しているであろう。簡単な結論である。ユダヤ人はドイツにおいておくことができず。それは時間の問題である。われわれは、例をみない断固たる措置をもって、ユダヤ人を国外にだんだんと追い出していくであろう。〔中略〕

この戦いにわれわれが敗北すれば、ゲルマン人にはひとつの居留地も残されないのである。それどころか全員が餓

死し、殺害されるだろう。それは、第三帝国の熱烈な支持者であろうとなかろうと、全員にふりかかることである。ドイツ語を話し、ドイツ人の母親がいるだけで十分なのである。

こうした認識からすれば、つぎのような考えも理解できるようになるだろう。すなわち、世界中からすべての良き血、すべてのゲルマンの血は、もしそれがドイツの側になれば、いつかはわれわれの破滅をもたらすものとなるだろう、という考えである。それゆえ、われわれが、最良の血をもつゲルマン人をひとり、ドイツにつれてきて、ドイツ人意識をもつゲルマン人に、われわれのために戦う戦士に育てあげれば、そのぶんだけ敵側は有益な人間をひとり失うことになるのだ。わたしはほんとうに、世界中からゲルマンの血をもつものを、呼びよせ、略奪し、盗むつもりである。それが可能なところでは、「ゲルマーニア」連隊という名称もだてではない。そのためのものである。「ドイツ」連隊と「ゲルマーニア」連隊がある。遅くとも二年以内に、非ドイツ系ゲルマン人からなる『ゲルマーニア』連隊を編成するのがわたしの目標である。²⁹⁾

ゲルマンという言葉は、まずナチスのいうドイツや、ドイツ的なるものから、ユダヤ人やキリスト教などを切り離し、敵としてとらえなおすための言葉として使用されている。戦争の危機が、あらためてユダヤ人や、フリーメイソン、マルクス主義者、キリスト教会など国内にいる「敵」に目をむけさせたが、こうした敵はドイツという枠をこえた「国際的」な勢力としてとらえられている。国際的という言葉が、ゲルマンという言葉のもつもうひとつの意味をひきよせてくる。ゲルマンは「血」と結びつけられて、ゲルマン人となり、ドイツという枠をこえる力をもつことになる。

一九三八年一月八日の演説は、戦争の危機がもたらした状況をヒムラーは「ゲルマン」という言葉で再構築しようとしたものと、まずはとらえておく。

ここで、ヒムラーの演説にでてくるキーワードをまとめて表にしておこう。³⁰⁾表1がそれである。これをみるとつぎに

表1 ヒムラーの演説に登場するキーワードの回数

演説日	ユダヤ人	アジア	大ドイツ国	ゲルマン帝国	大ゲルマン帝国
1938年11月8日	7	0	1	1	3
1940年2月29日	26	1	1	1	0
1940年9月7日	0	0	0	0	1
1942年6月9日	2	2	0	4 + 1 (<i>Imperium</i>)	0
1942年9月16日	3	7	0	1	2
1943年1月30日	1	0	0	1	0
1943年10月4日	18	5	1	5 + 1 (<i>Weltreich</i>)	1
1943年10月6日	23	2	3	4 + 1 (<i>Weltreich</i>)	0
1944年7月26日	3	4	2	3	2
1944年8月3日	1	0	2	1	0

出典 註の33を参照

凡例

- ① 「大ドイツ国」には、Großdeutschland, das großdeutsche Reich の二つを含む。
- ② 「ゲルマン帝国」には、ein germanisches Reich のほかに、das germanische Weltreich, das germanisches Imperium という表現も含めた。
- ③ 「大ゲルマン帝国」には、das großgermanische Reich のほかに、一九四三年一〇月四日の演説に登場する die großgermanische Gemeinschaft も含めた。

「大ゲルマン帝国」という言葉が出てくるのは、一九四〇年九月七日の演説である。

この演説は、メッツの日（総統連隊旗授与式）に、「アドルフ・ヒトラー親衛連隊」の将校団を前におこなわれたものであり、武装親衛隊の活動がテーマとなっている。ヒムラーは、親衛隊の社会基盤を整備するには、資金が必要で、その資金は「人間の屑、囚人、常習犯罪者を積極的な労働につかせて、そこから稼いだされなければならない」と述べ、こうつづける。

そうしていつさいの私情を排して稼いだ資金を、住宅、土地と耕地、入植地に投じるのである。わが部下や士官たちが生活し、大人数の家族が住む家をもてるようになり、たくさんの子どもをもてるようにするためである。われわれが生死をとにもするこのドイツにおける、この指導的な良き血統が増加しないようなことがあれば、われわれは世界を支配できないであろう。いま成立途上にある大ゲルマン帝国も、維持できないであろう。そのことは諸君にもよくわかっている

と思う。わたしは大ゲルマン帝国を維持できることを確信している。そのためには、まず前提をつくりださなければならぬ。もし、息子の数があまりにすくなければ、われわれは臆病にならざるをえない。一家に四人の男の子がいれば、戦争に打ってでることができる。二人が死んでも、二人の息子が家名をつぐことができるからである。⁽³²⁾

「いま成立途上にある」大ゲルマン帝国については具体的には規定されていないが、一九四〇年九月は、ドイツがオランダやデンマーク、ノルウェーなどのいわゆるゲルマン系の諸国を占領し、フランスも降伏させて、ヨーロッパ新体制についての構想が必要となった時期でもある。

ヘーゲヴァルト演説から約一年後の一九四三年一〇月四日、親衛隊幹部を前にしたポーゼンでの演説は、三時間一〇分にもおよぶ長大なものである。⁽³³⁾そこでは戦争の推移が節目ごとに反省をこめて総括され、敵国の情勢分析から、親衛隊によるムソリーニの救出、国内情勢、親衛隊の人事異動、ユダヤ人の疎開まで広範なことが語られている。この総括的な演説のなかで、ヒムラーがこの戦争の意味について言及しているところがある。そこにゲルマン世界帝国という言葉が登場する。ヒムラーは、プロイセンのフリードリヒ大王が多大の出血をしいられながら、七年戦争を戦いぬき、オーストリアから奪ったシュレージエンの領有を各国に認めさせたという故事をひきあいにして、こう語る。

「この戦争は、東方への道を開き、ドイツが世界帝国であり、ゲルマン世界帝国の建設を認めさせるものとなるであろう。それがこの戦争の意味なのである」⁽³⁴⁾と。

ここでは「東方をつつみこんで」ではなく、「東方への道を開き」と一歩後退した表現となっている。ヒムラーは自分の関心領域として、「ポーランド、バルカン、ラトヴィア、エストニア、リトアニア」⁽³⁵⁾の名前をあげているが、ウクライナやクリミアの名前が消えている。ゲルマン帝国の収縮ぶりは、大ゲルマンという言葉にもみとれる。この用語はこの演説でも、ゲルマン義勇軍団に参加した「大ゲルマン共同体」の古参闘士という表現にあるように、武装親衛隊との関連で

登場しているが、「オランダ、フランドル、ノルウェー、デンマーク」といった北欧と北西欧諸国に限定されている。

国防軍と競合する武装親衛隊は、隊員の徴募をドイツ兵役義務者の2%にかぎられていた。そのためドイツ以外のゲルマン血統を求めざるをえないという事情が、武装親衛隊と大ゲルマンという言葉の結びつきの背景にあるのかもしれない。それゆえ「大ゲルマン帝国」が武装親衛隊ではなく、戦争の意義と結びつけられたあの一九四二年九月一日のヘーゲヴァルト演説の独自性があらためてきわだたってくる。

表1によれば、「大ゲルマン帝国」という言葉は、一九四四年七月二六日の演説にも登場する。この演説は、ユダヤ人よりもアジアへの言及が多く、大ゲルマン帝国が複数回登場する点で、ヘーゲヴァルト演説によく似たパターンを示している。ちがうのは、「大ドイツ国」という言葉が、ヘーゲヴァルト演説ではゼロなのに、この演説では二回登場している点である。

この一九四四年七月二六日の演説は、あの七月二〇日のヒトラー暗殺未遂事件をうけたもので、ヒトラーの命令で新設された武装親衛隊第一五師団、擲弾兵師団の将校団を前におこなったものである。ヒムラーは、状況は厳しいと述べ、こうつづける。

諸君はかならずや状況の厳しさを知るときがくるだろう。諸君がもちこたえることができなと思うときがくるだろう。そういうときには、ちよつと未来のことを考えてみることもいいだろう。われらが勝利してから二〇年たったときのことを考えてみたまえ。われわれが勝利することは、わたしがいまここに諸君の目の前に立っていることとなじように、まぎれもないことである。そうしてこの戦争の意義はなんだったのか考えてみたまえ。戦後はどうなっているのか想像してみたまえ。⁽³⁶⁾

ヘーゲヴァルト演説をおもわせる語り口である。内外の情勢が逼迫し、敗戦が不可避となったこの段階で、ヒムラーはこの戦争の意義として四点をあげている。

(1) 全世界にたいして大ドイツ国の存在を歴史的に承認させること。

(2) 大ゲルマン帝国のはじまりと建設。デンマーク人、フラマン人、オランダ人、ノルウェー人など、ゲルマンの血をひく三〇〇〇万の人びとをひきいれることによって、民族の基盤を拡げること。

(3) ヨーロッパ大陸の支配と秩序維持。つぎの戦争では、国境から二〇〇〇キロメートル以上離れたところに防空監視所をおく必要がある。

(4) 一九三九年当時の民族の国境を、すくなくとも五〇〇キロメートル東に拡大したこと。その地にはドイツ人やゲルマン人が入植して、ゲルマン人の育種場となる。³⁷⁾

一九四二年九月のヘーゲヴァルト演説にはなかった「大ドイツ国」という言葉は、オーストリアと合邦しズデーテンラントを併合した大ドイツのことである。それを世界強国として世界に認めさせることが、戦争の意味の筆頭に掲げられている。「大ゲルマン帝国」の建設は二番目に後退している。戦局がドイツにとって不利になった段階で、前面にでてきたのが、すくなくとも世界強国としてのドイツの地位を確保することである、という印象をうける。

この一九四四年の演説にくらべると、ヘーゲヴァルト演説でかけられた「大ゲルマン帝国」は、北欧諸国の併合というよりは、「東方をつつみこんで」という言葉が示すように、ソ連占領のコンセプトと深くかかわっていたようにみえる。巨大な領土にみあうドイツ人がいない、という状況を克服するためのコンセプトである。

ヘーゲヴァルト演説から約三カ月後、ヒムラーに提出された「入植基本計画」(表2参照)によると、ドイツに併合された部分を除く旧ポーランドだけで、入植目標を達成するには八八九万九六〇〇人も不足しており、バルト地方では三一

表2 1942年12月 入植基本計画による目標人口と不足数 (単位=人)

	目標人口	ドイツ人口(現状)	ドイツ化可能人口	不足数
民族空間	12915300	4848100	4549000	3518200
東方入植空間	10234000	451400	883000	8899600
バルト空間	5225000	2300	2111000	3111700
合計	28374300	5301800	7543000	15529500

出典 Madajczyk, Czeslaw (Hg.), Vom Generalplan Ost zum Generalsiedlungsplan, München, New Providence, London, Paris: K.G.Sauer, 1994, Nr.71, S.238 表IIから作成。

凡例

- ①民族空間 (Volksraum) : ルクセンブルク、エルザス・ロートリンゲン、オーパークライ
ン、ウンターシュタイアーマルク、バーメン・メーレン、西ポーランド
- ②東方入植空間 (Ostsiedlungsraum) : ウッチ、ビャウイストク、総督府
- ③バルト空間 (Baltischer Raum) : エストニア、ラトヴィア、リトアニア

一万一七〇〇人も不足していることが、報告されている。この統計には、ヒムラーがヘーゲヴァルト演説で発表したウクライナへの入植はまだ含まれていない。またクリミアも含まれていない。それでも、ドイツが東西で予定している入植地には、一五五二万九五〇〇人という巨大な数のドイツ人が不足することになる。ヒトラーの東方生存圏要求は、ドイツの過剰人口を論拠にしていたが、戦争をつうじて明らかになったのは、ドイツの過剰人口であり、入植者不足であった。アジアの脅威に対抗し、ドイツが世界帝国になるには、なによりも人口問題を解決しなければならなかったわけである。その舞台に選ばれたのがヘーゲヴァルトを含む「東方」なのである。

ヒムラーの視線を追うことによつて浮上したヘーゲヴァルト演説の意義は、戦争の意味の再構築にあった。しかし、ヒムラーは節目、節目で、戦争の意味について言及している。それは、あらたな状況に応じて親衛隊の任務と課題を再定義する試みとみることもできよう。ヒムラーは案外、柔軟な構築主義者であったのかもしれない。

第二章 ナチズムと東方

一 東方という舞台

ヒムラーのヘーゲヴァルト演説の背景について調べていくなかで、興味深い記述にであった。ヒトラーの側近で、建築家で、軍需大臣となったシュペーアが、戦後ナチ戦犯としてシュパンダウ刑務所に収容されているときにつけていた日記がある。その一九四七年三月二六日の日記には、一九四二年八月中旬に、シュペーアが数人の工業家をともなつてヴィニツァにあるヒトラーの本営を訪問したときの様子が書かれている。

ちようどドイツ軍がバクーとアストラハンに怒濤の進撃をしているころだった。本営全体が、輝くばかりの気分であつた。会談のあとヒトラーは、木造兵舎をとりまく木陰で、飾り気のない木製のベンチに腰をおろした。われわれ二人だけで、平和な夕べであつた。³⁸「中略」

ヒトラーは、イギリス帝国の権力と強大さをイメージしながら、自らの世界帝国計画をつくりあげた。彼は世界中のゲルマン民族を自分の帝国に編入しようと考えていた。オランダ人、ノルウェー人、スウェーデン人、デンマーク人、フランマン人。しかしヒトラーは、ヒムラーとはちがつて、かれらをドイツ化するのではなく、独立性には手をつけるつもりはなかつた。そうすればゲルマン諸民族は、ヒトラーが創設した世界帝国の多様性とダイナミズムに寄与することになるだろう。ただドイツ語が、英連邦における英語のように、共通語としての役割をはたすことになる。³⁹「中略」

それからヒトラーは、どの家庭でも子どもが一種の追加的な収入源となるようなプレミア制度について語つた。一九三二年にはドイツの出産数の増加はほとんどゼロになつた。最近ヒトラーが計算させたところでは、ナチスの人口

政策は、一九三二年の増加数にくらべてほぼ三〇〇万人もの人口増をもたらしたとのである。⁽⁴⁰⁾ この戦争で数百万人が倒れたとしても、その数はたいしたことはない。平和な年が二、三年もつづけばふたたび取りもどすことができる。あらたな東方は、数千万人のドイツ人をうけいれることができるだろう。まさに東方はそれを待ち望んでいるのだ。〔中略〕

「いいかいシュペーア、いちど全部数え上げてみよう。ドイツの人口は八〇〇〇万だ。これにいまや一〇〇〇万人のオランダ人がつけくわわっている。かれらは本来、ドイツ人だ。それに、ああちよつと書き取っておいたほうがいいだろう、それにルクセンブルクの住民三〇万人、四〇〇万人のスイス人がくわわる。それからデンマーク人がいる。さらに四〇〇万人だ。フラマン人が五〇〇万人。さらに二〇〇万人のエルサス・ロートリンゲン人、彼らについては、なんとも思わないよ。」

ここでヒトラーは声を一段と上げて、せわしなくわたしがちゃんと書き取り、数え、合計しているか、いちいち念をおすようになる。合計がまだヒトラーの意にそわないと、ジーベンビュルゲン、あるいはメーレンのドイツ人をつれてきて、これにくわえ、ハンガリーと、ユーゴスラヴィア、クロアチアに住むドイツ人もくわえた。「みんなとりもどすのだ。すでにバルト・ドイツ人と、三〇万人の南ティロール人がいる。」ヒトラーはさらに加算した。それからノルウェー人とスウェーデン人があわせて一一〇〇万人いると。そのほかにヒトラーはさらに、ここらあたりはどこでも金髪で青い目のウクライナ人の子どもをみかけるが、ヒムラーは彼らがゴート人の子孫だとうけあってくれた。⁽⁴¹⁾ 大管区指導者のフォルスターとグライザーは、ポーランド住民の一〇%強が本来ドイツ人の血をひいているとヒトラーに語ったという。おなじようなことを、ロシア南部と中部担当のライヒスコミッサールからもくりかえし聞いているという。ヒトラーは、東方住民のうちどのくらいの人数が最終的にドイツ化できるかは、まだわからないとのことだが、「とりあえず一〇〇〇万人と書いておいてくれたまえ。これで全部で何人になったかね。」ここまででは

一億二七〇〇万人に達していた。ヒトラーはまだ不満足だったが、将来の出産数の増加を指摘することによしとした。⁽⁴²⁾

シュペーアが、ヒトラーとヒムラーのちがいを指摘しているところが興味深い。ヒトラーは、あまりゲルマン帝国という言葉を使用していない。一九〇五年から一九二四年までのヒトラーの全テクストのなかには、「ゲルマン帝国」という言葉は二回しか登場しない。それも「ドイツ国民のゲルマン帝国」といういいかたで、ドイツ国民の神聖ローマ帝国になぞらえたもので、ドイツ国民という枠をはめている。⁽⁴³⁾ これまでの研究によれば、ヒトラーはゲルマンという言葉を、ほぼ一九四〇年にいたるまで反ユダヤ、反キリストという意味をこめて使用していたとされる。ヒトラーは、一九四〇年四月九日のデンマークとノルウェー占領作戦の発動のさいに、「今日この日から大ゲルマン帝国が成立するであろう」と述べているが、これは北欧諸国の占領という具体的状況からの連想で、イデオロギー的な意味はないとされる。⁽⁴⁴⁾

また、ヒトラーが大英帝国をモデルと考えていたことは、ヒトラーのごく内輪の発言を記録した『食卓談話』でも確認できる。ナシヨナリズムを基盤とするナチズムは、世界帝国であった大英帝国を身近なモデルとすることで、ドイツ一国の枠をこえる発想が可能になったのかもしれない。しかしナチズムが一国の枠をこえる方向性をもっていたことは、「こころあたりはどこでも金髪で青い目のウクライナ人の子どもをみかけるが……」という部分とも関係している。

ヒトラーの側近でナチ党官房長官ボルマンも、おなじような発言をしている。ボルマンは、一九四二年七月二二日、総統本営の周辺にあるコルホーズを視察したときの印象を、ヒトラーにこう語っている。

「こウクライナの子どもたちをみると、とてもその後、偏平なスラヴ的な顔つきになっていくとは思えない。子どもたちは、たいいていの東バルト・タイプの間とおなじように、金髪で青い目をしている。それから、ふっくらとした赤いほおをし、ぽっつちやりしていて、とてもかわいらしくみえる。これとくらべれば、北方系が圧倒的なわが子どもたちは、

子ども時代には、まるで小馬のようにぎこちなくみえる⁽⁴⁵⁾」と。

さらにボルマンは、このあたりを車で回つてみると、成人男性は少ないが、子どもの多さにはびっくりすると述べている。

おなじような表現は、ヒムラーの一九四〇年二月二九日の演説のなかにもあった。

われわれが車で東方の村や町を通りすぎると、とてもびっくりするようなことに会うことがよくある。すくなくともわたしには驚くべきことなのだ。〔中略〕諸君は、金髪で、青い目をした人に出会うだろう。細長い顔つきをした、金髪で、背が高い人間が、われわれを憎悪にみちた目で見つめているのに。かれらは狂信的なポーランド人だ。君は、民族ドイツ人かと聞くと、いやちがう。ポーランド人だと答える。敵に屈しないかれらこそ、われらが血統、われらが最良の血を引くものであると結論せざるをえないだろう。

〔中略〕それから、じつにたくさんさんのヴァリエーションがあることに気がつくだろう。モンゴロイドそのものの顔つきをした人びとのなかに、数人の青い目が光るのをみたり、われわれとおなじタイプの人間で、ほかは良好に見える人たちのなかに、突然、つり上がった目をしたものや、頬骨がとびでた者がいることに気がつくだろう。そして、なるほどここは、異民族の血が混じりあった土地であることが納得されるのだ。⁽⁴⁶⁾

ヒムラーはヘーゲヴァルト演説でも、こう述べている。

「われわれが開戦にさいしてポーランド民族からしだいに除去したこうした指導者層が、モンゴル系の下層民を支配し、しだいにドイツ・ゲルマン系の指導者層が下層民と混血していくのである。その結果、青い目の、多産な腰つきをしているが、金髪の女性や、体つきはモンゴル系であるが、顔は細長かったり、北方系の体つきだが目が細かったり、ある

いは有色だったり、頬骨が出ている男女が生まれてくるのである。これが典型的なスラヴ人なのだ⁽⁴⁷⁾と。

東方は多民族の血が混じりあつた土地なのである。ナチズムが一国で完結しないで、ヨーロッパの規模での膨張をめざした理由はいくつがあるが、この多民族地帯で、山や海でさえぎられないひとつづきの東方という舞台も無視できない。ヘーゲヴァルト演説の背景にあり、また演説でヒムラーが注視するのが、この東方である。

では、東方とはどこを指すのだろうか。中世では、「オストマルク」という言葉はザクセンやバイエルンの東方辺境地域を指していた。しかし、ビスマルクの帝国が建設されるようになると、もつと北の「ポーランドやロシアと接するドイツの東部国境地方で、一部ポーランド人が居住する」地域を指すようになる⁽⁴⁸⁾。東方とは、ドイツの東を指すように聞こえるが、「オストマルク」という言葉に端的に示されているように、ドイツの一部も東方に属しているのである。ドイツと東方とはつながっているのである。ヒムラーの演説では、東方はドイツの対極をなすアジアと重ねられる一方で、他方はドイツ系の子孫が住むところとしてドイツと結びつけられている。東方は、アジア化とゲルマン化とふたつの視線がかさなるところである。東方は二重の意味をもたされている。

東方とは漠然とした無限定な言葉で、時代によって示す範囲も、意味づけもことなっている。ひとつ確かなのは、この地が中世以来、ポーランド人、ユダヤ人、ウクライナ人、ロシア人、ドイツ人、チェコ人、マジヤール人、バルト系諸民族をはじめとする複数の民族が、複雑な支配・被支配関係を重層化させてきた地域ということである。こうした地域で、ドイツ人の国民国家を形成することがいかに困難なことで、大きな矛盾をかかえこむことになるか。それを示しているのが、ビスマルクが作ったドイツ第二帝制であつた。ビスマルクは、ドイツを東方から切り離すために、多民族国家オーストリアを帝国から除外し、さらにポーランド人など少数民族を「帝国の敵」とし、差別することで、残りの多数派をドイツ国民につくりあげていこうとしたのである。

第一世界大戦では、ドイツは東西の二つの戦線で戦うことになった。西部戦線は膠着し、塹壕戦となったが、東部戦線ではロシアから広大な地域を占領し、ブレストリトフスク条約で「ドイツ東方帝国」の夢が実現するかにみえるところまでいった。東方では勝利していたものの、ドイツは敗戦ですべてを失った。それだけではなかった。あらたに独立したポーランドやチェコ・スロヴァキアなどにとりのこされたドイツ系少数民族は、各国が民族国家をつくるなかで迫害の対象にされたのである。ナチス・ドイツはふたたびこの東方に足を踏み入れ、東方はいまやウラル山脈の西側まで拡大することになったのである。

二 子どもの回収とその論理

ヒムラーやボルマンなどのナチ党最高幹部たちが、東方に足をふみいれて、感じたこと、びつくりしたことはなんであつたらうか。ひとつは、よく「金髪で青い目」の人びとをみかけることであり、もうひとつは子どもが多いことであつた。では、なぜ「金髪で青い目」の人びとをみて、びつくりしたのだらうか。ナチ人種理論⁴⁹によれば、金髪と青い目と白い肌は、北方人種の特徴であり、支配人種としてのメルクマールであつた。スラヴ民族が「劣等」で、「下等人間」であるためには、かれらは有色でなければならぬことになる。スラヴ人のなかに金髪碧眼の人びとをみて、ヒムラーたちが驚いたということは、それだけかれらがナチズムの人種観に深くとらわれていたことを物語るものである。

「敵に屈しないかれらこそ、われらが血統、われらが最良の血を引くものであると結論せざるをえないだろう」という部分も、不屈の精神性を持ち、従属的でないのが支配民族の特徴であるという人種観を物語っている。北方系と対比される東方は、アジア的であり、劣等で野蛮という考え方である。しかし、この引用文はある意味、それとは対立することも述べている。東方にはゲルマンの血を引く人びとも存在するということである。東方はアジア的であると同時に、ドイツとつながっていて、その延長上にあるというイメージである。東方はたんにドイツの東にある地域ではなく、アジアであ

ると同時にドイツともつながっているという二重性をもっているようである。

アッティラやスターリンのようなアジア的野蛮の象徴とされる指導者に、ゲルマンの血が流れているというヘーゲヴァルト演説での発言も、こうした東方観の二重性とかかわっているように思われる。ヒムラーはさらにこの演説でこうも述べている。

いまやわれわれは、このアジアの前地を征服しようとしているのである。およそこの世に存在する良き血統は、ゲルマンの血統である。われわれはその血を各地から集めてこなければならぬ。われわれは民族ドイツ人を祖国につれもどすであろう。ゲルマン人は、歴史と血統が強制するままに、望むか否かにかかわらず、理解しているか否かにかかわらず、このライヒに帰依しなくてはならない。諸君が注意しなければならない第一の原則は、諸君が東方で出会う良き血はすべて、獲得するか、さもなければ打ち殺すか、二つにひとつであるということである。もし良き血が相手側に委ねられたら、将来そこにふたたび指導者が生まれることになる。スケールにはいろいろあるかもしれないが、それはわれわれ自身にたいする犯罪となるだろう。つまり、われわれを打ち負かすことができるのは、われわれの血統⁽⁵⁰⁾だけだからである。

ヘーゲヴァルト演説が注目されるのは、ヒムラーが、ドイツ人兵士とロシア人女性とのあいだに生まれた子どもや、母親をドイツにつれ帰り、ドイツ化することについて、正面から論じている点にある。

総統は、ドイツ兵がロシアでつくった子どもの数が一〇〇万人から一五〇万人にもものぼるといふいくつかの報告に興味をもたれ、この問題にとりくまれました。多分、数はもっと少ないだろうが、数十万から一〇〇万人になることは確か

であろう。これらの子どもたちは、大量の失血を強いられているロシア民族にとっては、量的にも、なによりも人種的な質において、貴重な増加を意味するものとなるであろう。それゆえ総統は昨日、わたしに以下の指示を伝達された。この件については、さらに明確な権限と指示をうけることになっている。昨日の指示とは、われわれ親衛隊は、そうした子どもたち全員の所在を確認し、検査することである。人種的に価値がある子どもは、母親から引き離して、ドイツにつれていく。もし母親が人種的に良好で問題がなければ、母親もいっしょにつれていく。人種的に劣る子どもは置いていく。しかし残しておくことも損害となる、といわねばならない。なぜならドイツ人と人種的に劣るロシア人女性のあいだに生まれた子どもでも、ロシア人にとっては血の改善となるからである。⁽⁵¹⁾

ドイツ人兵士が産ませた子どもを捕捉するために、「呼び水として、月に一〇マルクを支給しよう。わたしはこの考えを総統に提案するつもりでいる。」そうすれば届け出があるだろう。こうして捕捉した子どもは、人種検査と選別をおこない、「二〇万人」くらいはドイツにつれていけるだろう。ドイツでは国民福祉団の施設に入れて育てる。⁽⁵²⁾

全体的な方針はこうである。われわれはこうした民族に文化をもたらしはならない。わたしができることは、総統が望まれることをそのまま言葉どおりくりかえすことだけである。(一) 子どもたちが学校で、車に轢かれないように、交通標識を読むことを学び、(二) 二かける二を学んで、二五まで数えられるようになり、(三) 自分の名前が書けること、それができれば十分であり、それ以上は必要ない。

われわれの任務は、人種的に価値のある子どもを選び出すことである。われわれはかれらをドイツにつれていき、ドイツの学校にいれる。もっと能力のあるものは、寄宿学校やナポラ「ナチスの教育施設」にいれる。そうすることで子どもたちは、はじめから自分の血を自覚し、大ゲルマン帝国の市民としての自覚をもって成長する。かれらを

ウクライナ人のナシヨナリストとして育てるようなことがあつてはならない。⁽⁵³⁾

子どもを回収する論理としてヒムラーが述べている点は、二つある。ひとつは、敵方に「優秀な血」が入ることで、将来ドイツにとって脅威となるものをあらかじめとりのぞくことである。将来の危険防止を目的としている点では、占領地の住民にたいする徹底的な愚民化政策も⁽⁵⁴⁾これにはいるだろう。もうひとつは、ゲルマンの血を集めてきて、大ゲルマン帝国の市民を育成することである。これはドイツの人口基盤の拡大と人口増大を意図したものとみてよいだろう。

しかしよくみると、よき血をもつ子どもをドイツにつれていくことは、たんにドイツの人口を増やすためだけではなく、同時に相手側の将来の指導者候補をひとり奪うことになるのだという論理も語られている。ドイツのプラスは、相手側のマイナスになるという考えかたである。ゼロサム的な論理といえる。先にも引用したように、一九三八年一月八日の演説で、ヒムラーはこう述べていた。「最良の血をもつゲルマン人をひとり、ドイツにつれてきて、ドイツ人意識をもつゲルマン人に、われわれのために戦う戦士に育てあげれば、そのぶんだけ敵側は有益な人間をひとり失うことになるのだ」と。このときは、まだ子どもが対象ではないが、語られている論理はおなじみものである。子どもの回収は、相手側にダメージをあたえるためでもある。「獲得」して「育成」することは、「除去」し「抹殺」することと、おなじ意味もち、両者は表裏一体の関係にある。両者はそれぞれ別々のことではなく、ナチズムにおいては車の両輪のような関係にあったのではないか。こうした考え方の背後には、世界は対立・競合関係にあり、パイはかぎられていて、一国がのしあがるためには、他国を蹴落とさなければならぬという時代状況があつたといえよう。ナチズムの時代は、ドイツとイギリス、それにアメリカが世界経済の覇権をめぐつて二度の世界大戦がおきた「世界戦争の時代」でもある。この世界戦争の時代は、一般的には低成長の時代であつた。国内ではかぎられた資源やサーヴィスの配分をめぐり、選別と格付けが強化されざるをえなくなつた。国際的には、世界市場へのアメリカや日本などの進出が、ヨーロッパの輸出市場を奪うもの

として、脅威とうけとめられるようになった時代である。子どもの回収にみられるゼロサム論理は、この低成長と世界戦争の時代の論理とひびきあっている。まだ戦争にはなっていない一九三八年一月八日のヒムラーの演説に、「戦士」や「敵側」という言葉がみえるのも、世界戦争の時代を反映したものと見えよう。

三 ヒムラーのこだわり

ナチスがおこなった子ども連行、略奪、誘拐については、ドイツ人兵士の子ども回収だけにとどまらない。軍需工場などで働かせる労働力や、防空補助要員にするためにドイツにつれてこられた子どもたちもたくさんいる。⁽⁵⁵⁾しかし、ここではドイツ化するにつれてこられた子どもを対象をしぼって、ヒムラーが子どもの回収にこだわった理由について、さらに考えてみよう。

子どもの問題は、一九三九年ドイツがポーランドを占領するとすぐに登場している。一九三九年一月二五日のナチ党人種政策局による「ポーランド住民の取り扱いに関する覚書」では、ドイツ領土に編入された地域に住むポーランド人住民のうち、人種的に価値の高い子どもは、ドイツで教育し、ドイツ化するという考えが表明されている。また「どっちつかずと評価されたポーランド人のばあい、かれらが子どもをドイツの教育施設で養育されることを望むばあいには、ポーランド残余部分への国外追放から免除される」とある。⁽⁵⁶⁾子どもは、ドイツにたいする忠誠心をひきたすための手段として、一種の人質、両親にたいする圧力としても考えられている。

一九四〇年五月のヒムラーの「東方異民族の取り扱いに関する覚書」でも、学校教育が人種選別と民族政策の手段として重視されている。ヒムラーは、東方の非ドイツ系住民には、四年制の小学校で十分だとし、子どもを上級学校に通わせようと望む親は、申請書を提出し、人種検査をうけ合格すれば、ドイツの学校にいれることができるようにすると述べている。これは「社会的上昇意欲」や「適応能力」を重視した選別のようにみえる。しかし両親が申請しなくとも、「毎

年、総督府に在る六歳から一〇歳になる子ども全員について、貴重な血統であるか、そうでないかの選別を実施する。貴重な血統として選別されたものは、両親の申請にもとづき許可された子どもと同じように扱われるであろう⁵⁷⁾と述べているから、かならずしも社会的上昇意欲や適応力を重視した選別だけではなかったと思われる。選別の理由としてヒムラーは、「こうした良き血統の人間によって、この東方の劣等民族が、われわれにとって危険な、われわれに匹敵する指導者層を手に入れるおそれを消しておかなければならないからである⁵⁸⁾」という。

一九四一年六月にソ連との戦争がはじまると、ヒムラーはレーベンスボルンの事務局長に、ソ連に在る民族ドイツ人の子どもを世話を委託した。保育所を設置し、ドイツに里子にだす手はずが整えられ、対象地域もヴォルガ地域から、ドイツが占領するソ連全域に拡大された。対象も民族ドイツ人にかぎらず、現地住民のなかから親のない子どもが孤児院や収容所で選別をうけさせられるようになった⁵⁹⁾。

一九四二年二月二六日、ヒムラーはドイツ民族リストへの登録を拒むポーランド総督府のドイツ系住民にたいして、子どもを両親からひきはなして特別の施設に収容し、両親は強制収容所にいれるように命令をだしている⁶⁰⁾。ドイツ民族リストへの登録は、一九四〇年九月一二日のヒムラーの布告にもとづいているが、登録するとポーランド人には認められていないさまざまな特権を手に入れることができた。多めの食料配給や、上級学校への進学、居住地にとどまる権利などである⁶¹⁾。しかし兵役の義務も生ずるため、戦争が長期化し、戦局が悪化すると、登録を忌避する者が多くなった。ヒムラーは登録促進のための圧力としても、子どもを隔離し、ドイツ化しようとしたのである。

ヒムラーは、ドイツに歯向かうバルチザンの子どもたちも、ドイツ化しようとしている。有名な例は、リディツェ村の事例である。ペーメン・メーレン保護領総督代理に就任したラインハルト・ハイドリヒが、一九四二年五月ブラハで襲撃され、六月四日に死去すると、ヒトラーは報復としてリディツェ村の破壊を命じた。村の一五歳以上の男性は射殺され、女性はドイツにある強制収容所に送られ、子ども九八人のうち、現場でドイツ化可能と判定された三人と一歳以下の七人

をのぞく、八八人がウッチにある収容所に送られた。このうち「再ドイツ化可能」と判定された七人は、その後、ドイツ風に改名して、養子にだされた。残りの八一人は絶滅収容所で殺害されたといわれている。⁽⁶²⁾

男性は射殺し、女性は強制収容所に送り、「人種的に良好な」子どもは「ドイツ化」という政策は、一九四二年六月のスロヴェニアでの反パルチザン戦争でもとられた。さらに一九四二年一月から一九四三年八月にかけて、総督府のザモシチ地区では三〇〇カ村のポーランド人住民一万人を対象とする住居と土地のあけわたし作戦が強行された。約五万一〇〇〇人の住民が収容所に入れられ、残りは逃亡し、あるいはパルチザンとなつてゐる。このポーランド住民の「疎開」と民族ドイツ人の入植作戦は、同時にはげしいパルチザン戦争をひきおこした。⁽⁶³⁾このとき「人種的に良好な」ポーランド人の子どもやパルチザンの子ども約四五〇〇〇人が、「再ドイツ化」のためにドイツ本国に送られてゐる。⁽⁶⁴⁾

一九四四年五月になつてもまだヒムラーは、クロアチアを管轄する第七エスエス義勇山岳師団「プリンツ・オイゲン」の司令官にたいして、「パルチザン」に容赦なく対処するように命令し、「両親のいないバルカンの青少年を捕まえて」ドイツにつれてくるように指示している。そうした少年少女をヒトララーの忠実な支持者に育て、将来、国境地帯を防御するために送るかえすためである。⁽⁶⁵⁾こうしてポーランドや、ソ連、バルカンなどから「略奪」された子どもたちの数は、少なくとも五万人に達すると推定されている。⁽⁶⁶⁾子どもを奪う理由はさまざまであつたが、共通しているのは、敵に打撃をあたえ、不足しているドイツの人口を補うことであつた。しかし、ヒムラーが子どもたちの回収とドイツ化にこだわつた理由は、それだけであつたのだろうか。

ヒムラーの演説を読んでいると、語られているのもっぱら東方に住む人びとのことで、ドイツ人についてはあまり言及されていないことに気がつく。ポーランドやソ連に住む人びとについては、多数の民族が識別され、ドイツの血を引く人びともいれば、アジアの血を引く人びともいて、長年にわたり混淆をくりかえしてきたと語られている。しかし肝心の

ドイツ人については、金髪で青い目の北方系の特徴がドイツの血を引くものとされてはいるが、積極的には語られていない。ドイツ人は、どのような人びとだったのだろうか。

一九三五年のいわゆるニュルンベルク法の「ドイツ国公民法」と「ドイツ人の血と名誉を守る法」は、それまでの「アーリア人」と「非アーリア人」という言葉にかわって「ドイツ人」と「ユダヤ人」という概念を導入したことで画期的なものであった。アーリア人という概念は、もともとはユダヤ・ヘブライ的な世界の説明の仕方とはことなるものを求める動きのなかから登場したものである。アーリア人は、インド・ゲルマン語族という言語の共通性が人種によりみかえられたもので、ユダヤ人とヨーロッパ人を区別するために使用されたが、いくつかの問題をふくんでいた。たとえば、言語のことなるフィンランド人とハンガリー人は非アーリア人となり、ヨーロッパという枠組みから除外されることになり、イギリスとその植民地インドが同じアーリア人ということになってしまふ。こうしたこともあり、一九三五年の「ドイツ人の血と名誉を守る法」では、「血」という概念がはじめて導入され、「ドイツの血の純粋性がドイツ民族の存続の前提である」とされ、ドイツ人は「ドイツの血をひくもの」と定義され、ドイツ人とユダヤ人の結婚は法的に禁止された。

しかし、同語反復的なこの定義では、ドイツ人は単一の純粋な人種であるかのようなイメージが生ずる。ドイツ人兵士とロシア人女性のあいだに生まれた混血児をドイツにつれ帰り、ドイツ人として育てると聞いたときの違和感も、こうした純粋人種イメージとかわわつていよう。親衛隊への入隊志願者は、提出した写真にもとづき、五つのグループに分けられた。(一) 純粋な北方人種。(二) 北方系の要素が優勢な人種か、ファーレン「平原」人種。(三) これらに、アルプス人種、デイナー「バルカン半島西側」人種、地中海人種が若干混じったもの。(四) 東方の要素が優勢な人種か、アルプス起源の人種。(五) 非ヨーロッパ系人種。このうち後のほうの(四)と(五)に分類されたものは、親衛隊員となることはできなかった。⁽⁶⁷⁾つまり、ドイツ人は複数の人種とその混血から構成されている複合民族ということになる。また、ヒムラーと親衛隊はそのことを承知していたことにもなる。この分類は、ヨーロッパ内部の人種を北方人種を最上位にお

いて序列化した人類学者のハンス・F・K・ギウンターの説をとり入れたものである。⁽⁶⁸⁾ ヒムラーが金髪で青い目の北方系の血にこだわったのは、ドイツ人が純粹の血統であったからではなく、複合民族で混血であったからである。ヒムラーが、東方占領地などからやつきになって北方系の血を回収しようとしたのは、ドイツ人の血を改善するためでもあった。ヒムラーは、一九三八年に指導者養成学校ナポールの生徒にこう述べている。

われわれは北方系の血を必要としている。北方人種を。それは基盤となる人種で、国家を指導する人種であり、そうあり続けてきた血統であり、今後もそうありつづけるであろう。北方人種はドイツにおいては、けっしてドイツ人を分かつものになつてはならないし、そうならないであろう。自分がとくに人種的に望ましい姿形をもっていると自認するものは、だから自分が他人より、たとえば黒い髪をした者よりも、価値があり、優れている、と思つてはならない。そんなことを許せば、社会的な階級闘争を克服したというのに、それに代わつて、人種的な階級闘争をひき起こすことになるからである。価値が高いとか、低いとかいうことは、わが民族にとつては災いとなることである。

わたしは北方系の血に、ドイツの人びとを分かつものではなく、すべての人びとを結びつける血の要素をみてい⁽⁶⁹⁾る。

将来のエリートたちを前にした訓戒であるが、ヒムラーはドイツ民族が複数の人種から構成されていることを認めている。その上でヒムラーが強調するのは、ドイツ民族には多かれ少なかれ北方系の血がながれていて、それが接着剤となつて、ドイツ民族をひとつにまとめているという論理である。北方系の血を増やすことで、ドイツの民族的一体性が強化されるという考え方を、ここにみることができるといえる。ヒムラーのこだわりは、ドイツ民族の現実を肯定するのではなく、ドイツ人を創つていくことにあつたともいえる。それがナチズムの人種主義を推進するひとつのダイナミズムとなつてい

ヘーゲヴァルト演説からは、ヒムラーがこどもの回収にこだわったもうひとつの理由をひきだすことができる。それは長期的視点と関係するものである。ヒムラーはこう語っている。「精神的な態度をかえなければ、民族は死滅してしまう。そうなれば、今回はアードルフ・ヒトラーのような人物がいたからアジアの先兵との戦いに勝つことができたが、将来、シベリアで復活したロシア人や、広大なアジアの空間にいる別の民族と戦うときがいつかやってくるだろう。そのときにはきつと勝利することはできないであろう」と。アジアとの戦いは、これで終わったわけではなく、将来、ふたたびやってくるだろう。そのときにはもうヒトラーはいない。だから、そうした時代にそなえるために、ドイツ人の精神的な態度をかえなければならぬという。このばあいの「精神的態度」とは、「キリスト教の影響力を排除し祖先崇拜を復活すること」である。このほかヒムラーは「民族の死滅」を防ぐ手だてとして、「ゲルマン人をつれもどすこと」と、「人びとに土地と農地を確保すること」をあげている。⁽⁷¹⁾

第三章 世界戦争の時代の人口問題と人種主義

一九四一年の冬、カイザー・ヴィルヘルム人類学研究所のアーベル教授は、国防軍統合司令部の委託をうけ、四万二〇〇〇人以上のロシア人捕虜について詳細な人種調査を実施した。⁽⁷²⁾ その報告書の内容が、ナチ党人種政策局のメンバーで、東方占領地域担当省で人種問題を担当したヴェツェルの鑑定書のなかで紹介されている。⁽⁷³⁾ アーベル教授によれば、ロシア兵には「想像していた以上に北方人種の特徴が存在する」ことが判明した。それゆえ「ロシア人はこれから先、ドイツ民族にとって特別に危険な存在になる」ことを指摘し、ロシア人を過小評価することが危険であると強く警告した。教授によれば、「ロシア人は、生物学的にはドイツ民族よりもはるかに強く、われわれは東方問題をけつして解決できないかも

しれない。その危険性は大きいにある。今後二五年ないし三〇年以内に、東方で新たな戦争がおこる可能性がある」という。生物学的強さとは出生力の高さであろう。こうした状況でアーベル教授があげる解決策は、「ロシア民族を絶滅するか、そのなかの北方系の特徴をもつものをドイツ化するか、二つにひとつしかない」というものである。⁽⁷⁴⁾

ヘーゲヴァルト演説とのちがいは、ロシア人の「アジア化」という視点が目につかないことであるが、将来「東方で新たな戦争がおこる可能性」もふくめて、多くの表現がヒムラーとそっくりなのが注目される。ヴェツェルも、「肝心なのは、ロシア人の生物学的に圧倒的な力にたいして、どのようにしてドイツの支配を長期的に維持するかである」と問題を提起する。そして「将来の世界政治は人口という原則によって規定されるようになるだろう」との見方を示し、巨大な人口を擁する東アジアと「独立インド」の台頭をひきあいにして、八〇〇〇万ないし八五〇〇〇万人の人口では、「世界強国ドイツはあまりに数的に弱体である。『中略』ドイツが世界列強としてとどまりたいのなら、他の民族のなかから北方系やファーレン系の特徴をもつものをわが民族体に引き入れることにますます依存するようになるだろう」と述べている。⁽⁷⁵⁾

ヒムラーやボルマンが、東方に足をふみいれて、おどろいたのは金髪で青い目の人びとの存在だけではなかった。妊婦や子ども数の多さにもおどろいていた。二〇世紀のドイツは、出生率が低下をつづけ、少子化が進行し、人口危機、ドイツ民族の死滅がさげられた時代であった。⁽⁷⁶⁾ その危機感、人口増加をつづける他国と比較することで、いっそう強くなる。ドイツにとって世界戦争の時代は、人口問題の時代でもあったといえる。人口は国防力の基盤であり、国力を示すものであると同時に、植民地の獲得や領土拡大を正当化する論拠と考えられていたのである。

ヒムラーのヘーゲヴァルト演説の大きな特徴は、ユダヤ人への言及がすくなく、ユダヤ人が重要な役割を担っていないという点にあった。そこで、このユダヤ人の不在に注目して、この演説の内容をとらえなおしてみると、いくつかの興味

深い論点がみえてくる。

第一に、ナチスの人種主義といえは、なによりも反ユダヤ主義を想い浮かべるが、それにとどまらない広がりをもっていたことがわかる。この演説からは、人種主義はなによりも人口問題を解決する手段として位置づけられ、推進されていたことが明らかになる。東方の「劣等人種」を強制的に退去させ、そのあとに支配人種であるドイツ人やゲルマン人を入植させ、人種の育種場をつくる。ドイツ人兵士の子どもや、北方系の血の外観をそなえた人びとを回収し、ドイツにつれ帰って、「再ドイツ化」する。それはドイツの人口増加をはかるだけでなく、相手側から「優秀な血」を奪い、人口基盤に打撃をあたえることを意図したものであった。一九三三年にナチスが政権について、最初にだした法律には、一九二六年に社会民主党によって削除された刑法第二一九条と二二〇条の再導入がふくまれていた。その狙いは、中絶にたいする罰則と訴追を強化することで、出生率の回復をはかることにあった。これをおろそかにナチスは、六月には結婚資金貸与制、七月には「遺伝病をもつ子孫を予防するための法律」、いわゆる断種法などをつぎつぎと制定している。こうした人口政策はドイツ人の人種の改善もめざしていたので、内にむけた人種主義ととらえることができる。ナチズムは、「戦争の時代」の重要なテーマである人口問題に、人種主義を武器としてとりくんだものといえる。このばあいの人種主義は、世界を人種という枠組みで、整理し、理解しようとするもので、相手と自分をそれぞれ人種化してとらえるものである。

第二に、アジアがユダヤ人にかわってナチズムの主要な敵として浮上したことである。

アジアとの戦争という表現は、ヒムラーの演説では、一九四二年六月九日のハイドリヒの葬儀のあとの演説のなかに登場している。「戦争はけっして感傷にひたる問題ではない。戦争は勝たねばならない。なぜならこの戦争はヨーロッパとアジアの対決なのだから。ゲルマン帝国と劣等人種との対決なのだから」とあるように、ソ連との戦争は、アジアとの戦争、劣等人種との戦争におきかえられている。ヘーゲヴァルト演説では、こうした見方がくりかえされただけでなく、将

来もアジアとの戦争がくりかえされるといふヴィジョンが語られている。ユダヤ人はもはやナチズムの主要な敵としては位置づけられていない。かわつてアジアの脅威が、なによりもその人口の規模と出生力とともに強調されている。こうした主敵の交代の背景には、ポーランド総督府でユダヤ人の殺害が進展していたという事情もある。もちろんヒムラーが望んだ一九四二年中に、総督府のユダヤ人を全員「疎開」させることはできなかったが。

第三に、ユダヤ人はもはや説明原理としてもちいられていないことである。

あのユダヤ人迫害として名高い「水晶の夜」の前日におこなわれた一九三八年一月八日のヒムラーの演説では、「ユダヤ人は、あらゆる否定的なことの大もとであり、推進者である」と述べられていた。ユダヤ人は、ナチズムの敵をまとめあげ、統合する説明原理として使用されていた。しかしヘーゲヴァルト演説では、ソ連との戦争を正当化する論理は、もはやユダヤ人＝ポリシエヴィズムとの戦いではなく、アジアの脅威との戦いであつた。ロシアはアジアの前地、先兵とされ、アジア化されている。ここではユダヤ人ではなくアジアが、ナチズムに敵対する勢力の統合の核としてイメージされるようになっていく。ドイツがソ連を占領し、ソ連をドイツの植民地とする可能性が開けてきた段階では、アジアが新たな状況を説明するための論理として使用されるようになっていくのである。

第四に、それではユダヤ人の絶滅政策はどう説明されるのであろうか。ナチスが敗戦のまぎわまでユダヤ人の移送と殺害にこだわったのは、どうしてなのであろうか。⁽⁵⁰⁾それは、ヒトラーがそもそもはじめからユダヤ人の絶滅をめざしていたからである、という説明の仕方がある。ヒトラーの意図や意志を重視するので「意図派」ともよばれている。これを一方の極とすると、他方の極には、ユダヤ人に対する迫害と民族殺害をヒトラーの意志からではなく、状況とのかかわりなかに理解し、説明しようとする人びとがいる。こうした研究者たちは、個々の局面的実証的な分析をつうじて、迫害と殺害がエスカレートしていく構造を明らかにしようとしてきたため、「機能・構造派」ともよばれている。なかでも、ナチスの人種政策を「狂気」とか「非合理的なもの」と片づけるのではなく、「合理的」で、「経済的」な計算にもとづくも

のであるとするアリーやゲルラハたちの一連の研究は、絶滅政策を別の政策目的を実現するための「手段」とする方向を切り拓いてきている⁽⁸¹⁾。

本稿の立場とかなりかさなりあうロンゲリヒは、「自己目的化」という説を提起していると考えられる。かれは一九四二年春から初夏にかけての状況を重視し、そこでユダヤ人の殺害をヨーロッパ的規模にまで拡大することが決定されたという。この段階でユダヤ人問題の最終解決が戦争目的化されたという考えである。戦局が不利になっても、ヒムラーたちがユダヤ人の移送と殺害に狂奔したのは、それが戦争目的となり、自己目的化していたためで、いまさら放棄できなくなったというのである⁽⁸²⁾。

それでは、ヘーゲヴァルト演説からは、こうした問題を考えるどのような手がかりをひきだすことができるであろうか。ヘーゲヴァルト演説が示すことは、ひとつにはナチ人種主義の核心には人口問題があり、人種主義は人口問題を解決するための手段でもあったということである。ドイツにとって人口問題は、世界戦争の時代の中心的な課題でもあった。人口問題に「人種選別」と「東方入植」で対処するというコンセプトは、さかのばれば、一九三二年の親衛隊人種局設立命令や、その発想のもととなった第一次世界大戦後の右翼民族運動である「アルターマーン」に、さらにさかのばれば第一次世界大戦中の全ドイツ派の戦争目的論のなかにいきつくことができる。第二次世界大戦中の「人種と入植」というコンセプトは、第一次世界大戦までさかのぼることができるのである。これまでヒトラーの『わが闘争』に表明されたことを出発点として、ヒトラーの考えや意図の連続性が主張されてきた。しかし、これをヒトラー「個人の思想」の連続性としてではなく、ヒトラーが取り組んだ「問題の連続性」ととらえなおしたらどうであろうか。二つの世界大戦にまたがる世界戦争の時代の問題と考えれば、解決すべき課題はいつもそこにあったことになる。本稿にそくしていえば、ヒムラーは「人種と入植」それに「親衛隊と警察」という手持ちの資源をもとに時代の問題と取りくみ、あらたな状況に直面すると、課題と自分たちの役割を再定義し、再構築していった。課題は連続しているが、解決方法は状況にあわせて再構

築されている。連続しているようで、変化しているし、変化しているようで連続しているようにみえる。「意図派」と「機能派」の対立というものも、世界戦争の時代の問題というより大きな枠組みのなかで、とらえなおすことができるかもしれない。

ユダヤ人絶滅政策について、ヘーゲヴァルト演説から導きだせるもうひとつの手がかりは、ユダヤ人問題を子どもの回収の問題とセットにして考えてみることである。つまりユダヤ人問題を、それだけを切り離して扱うのではなく、ナチ人種主義のなかで考えなおしてみることである。するとまず、ドイツ人兵士の子どもは、たとえスラヴ人が母親であつても、金髪で青い目をしていれば、回収の対象となつた。パルチザンの子どもでも同様であつた。これにたいしてユダヤ人の子どもは、回収の対象とはなつていない。ユダヤ人はドイツ化の対象とはならない。ドイツ人にとっては絶対的な他者とみられていたことがわかる。

子どもの回収にみられたヒムラーの論理は、ゼロサム的な世界観であつた。その特徴は、たんにドイツの人口増加や人口基盤の強化をはかるだけでなく、競争相手や敵方の人口基盤に打撃をあたえ、人口減少をはかることがセットとして考えられていた点にある。ヒムラーは、敗色が濃厚になつた戦争末期になつてもユダヤ人の移送と殺害にこだわつていたが、子どもの回収にもおなじように最後までこだわつていた。回収・育成と排除・殺害とは車の両輪のような関係にあつたのである。ヒムラーが敗戦まぎわまで子どもの回収にこだわつた背景には、ヒトラーなきあとの時代にそなえてドイツの人口基盤を強化するという意図がみられた。それはアジアとの戦争にそなえた長期的なヴィジョンと関係している。もしユダヤ人の殺害と北方系の特徴をもつ子どもの回収が車の両輪であるならば、ユダヤ人の移送と殺害も長期的なヴィジョンと関係していると考えられることもできよう。このばあいは、将来に予想されるダメージの芽をあらかじめつんでおくというものである。ユダヤ人の殺害が戦争目的となり、自己目的化したとするロンゲリヒにたいしては、ヘーゲヴァルト演説からは、長期的なヴィジョンにもとづく予防策という論点がみえてきたように思う。

最後に、このヒムラーのヘーゲヴァルト演説と、史料Ⅰのヒトラーへの上申事項メモをつきあわせることで浮上する問題にふれることで、本稿をしめくくることにしよう。

それは大戦中のナチズム体制における政策決定のメカニズムに関するものである。ヒムラーは、演説のなかでドイツ人兵士の子どもの回収について、こう述べていた。

「それゆえ総統は昨日、わたしに以下の指示を伝達された。この件については、さらに明確な権限と指示をうけることになっている。昨日の指示とは、われわれ親衛隊は、そうした子どもたち全員の所在を確認し、検査することである」⁽⁸³⁾と。国防軍兵士の子どもにかかわる事柄は、本来なら国防軍の所轄事項であろう。それをヒムラーが率いる親衛隊と警察がひきうけるには、ヒトラーからの指示と権限付与が必要となる。逆に、ヒムラーが他の官庁や機関の権限にかかわる問題に手をだそうとしたり、協力を必要とするばあいには、ヒトラーに働きかけて、お墨付きをもらおうというやり方である。

たとえばヒムラーは、ドイツ人兵士がロシアの女性に産ませた子どもを捕捉するために、「呼び水として、月に一〇マルクを支給しよう。わたしはこの考えを総統に提案するつもりである」と述べ、じつさいヒトラーにこの件を上申している。手当ての支給は財政にかかわる問題なので、民政府や財務省の担当で、親衛隊の権限外のことである。そうした案件の処理にヒトラーが利用されていたともいえる。「われわれの組織ではなく、国防軍やすべての民政府によって実施されるものについては、さらに総統の命令をとりつけることが重要である。ドイツ人兵士の子どもの出生をできるかぎり避けるためには、わが兵士たちに避妊具を大量に配布しなければならぬ」⁽⁸⁴⁾とヒムラーも述べている。

ここで注目されるのは、ヒムラーは、国防軍兵士への避妊具の配布というこまかい問題までも、ヒトラーに相談しようとしているということである。ということは、ユダヤ人の移送や殺害も当然、ヒトラーに相談し、ヒトラーによる指示や権限付与があったと考えても不自然ではないだろう。それを示す痕跡が、史料Ⅰに残されている。「Ⅳ 民族と入植

1. ユダヤ人の移住　　今後はどのようにすすめるか」という部分である。⁽⁸⁵⁾ヒトラーとヒムラーのあいだでも「移住」という偽装語が使用されている点が興味深い。ヒムラーは明らかにヒトラーの指示を求めていることがわかる。ユダヤ人の民族殺害も、こうしたヒトラーと現場をあずかるヒムラーや、他のナチ体制指導部とのあいだのキャッチボールによって展開していったと考えられるのではないだろうか。

おわりに

ヘーゲヴァルト演説からは、まだまだ興味深い論点をひきだすことができる。たとえば「ナチズムにおける文明化の使命の否定」という問題などがあるが、それについては別の機会に譲ることにする。

本稿は、人口問題をあつかった二〇一〇年前期の特講義「西洋社会史」の一部であり、そこからスピン・アウトしたものである。毎回配布したコメント用紙を介した参加者との質疑応答のおかげで、問題を整理できただけでなく、あらたな論点をみつけることができた。校務がつぎからつぎと降ってきて、帰宅が夜の十一時をすぎる日々がつづくなか、こうして講義の一部を形にすることができたのも、読史会の編集委員のみなさまと、辛抱強く原稿の完成をまってくれた古瀬先生のおかげである。記して感謝する。

註

- (1) Heinemann, Isabel, *Rasse, Siedlung, deutsches Blut : das Rasse- und Siedlungshauptamt der SS und die rassenpolitische Neuordnung Europas*, Göttingen : Wallstein, 2003, S. 453 Anm. 121
- ヒムラーの本営が、ヒトラーの本営から三〇キロ以上も離れたところにあつたのは、ヒムラーの副官カール・ヴォルフによれば、当時ヒムラーは総督府のユタヤ人絶滅に従事してついで、びきるかぎりポーランドに近い所にいることを望んだからとされる。参照 Lang, Jochen von, *Der Adjutant : Karl Wolff : der Mann zwischen Hitler und Himmler*, München : Herbig, 1985 S. 180°。総統本営との距離については同書 161 頁。
- (2) *Heinrich Himmler: Geheimreden 1933 bis 1945 und andere Ansprachen*, herausgegeben von Bradley F. Smith und Agnes F. Peterson : mit einer Einführung von Joachim C. Fest, Berlin : Propyläen Verlag, 1974, S. 251 [以下 *Himmler: Geheimreden 1933 bis 1945* と略]
- (3) たとえば、一九四〇年二月二十九日、大管区指導者と党幹部を前にした演説 *Himmler: Geheimreden 1933 bis 1945*, S. 128 や、一九四〇年七月九日、武装親衛隊ライプシユタ・ンダルテの「アードルフ・ヒトラー」の将校団を前にした演説 *Nbg. Dok. 1918-PS IMT, Bd. XXIX, S. 104*
- (4) *Nbg. Dok. 1919-PS IMT, Bd. XXIX, S. 145*
- (5) 一九四二年九月一六日のヒムラー演説の全文は、Jacobsen, H.-A. und Jochmann, Werner (Hg.), *Ausgewählte Dokumente zur Geschichte des Nationalsozialismus 1933-1945*, III (Bielefeld 1961), Dokument 16: IX 1942 S. 1-13 [以下 *Jacobsen und Jochmann* と略] にある。一部省略やればづるが演説の概要を（かむ）ことが出来るのが、Opitz, Reinhard, *Europastrategien des deutschen Kapitals 1900-1945*, Köln: Pahl-Rugenstein, 1977, S. 921-930 である。一部を抜粋したものは、Schumann, Wolfgang und Nestler, Ludwig (Hg.), *Weltherrschaft im Visier: Dokumente zu den Europa- und Weltherrschaftsplanen des deutschen Imperialismus von der Jahrhundertwende bis Mai 1945*, Berlin: VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, 1975 2] Madajczyk, Czeslaw (Hg.), *Tom Generalplan Ost zum Generalsiedlungsplan*, München: New Providence: Londo: Paris: K. G. Sauer, 1994, にある。
- (6) この問題を手がかりにしたのが、拙稿「野蛮なゲルマン人はどのようにして清潔なドイツ人になったか」『史艸』（日本女子大学）五〇（二〇〇九年二月）一三九—一五五頁である。この論文は、ドイツのナシヨナル・アイデンティティが、フランスやユタヤ人とかかわりだけでなく、なによりも植民地や東方とかかわりで形成されてきたことを論じたものである。
- (7) 「住民の大部分がユタヤ人であつたかつてのロシア都市『ゼトール』」(Jacobsen und Jochmann, S. 1)、『レーニンや

スターリンなどの独裁的な権力者や、ユダヤ人は、みなアジアとの典型的な混血であるからだ」(Ibid. S.1)、「それと「もしアリア人がもはや存在しなくなったとしたら、世界はユダヤ人や劣等人間だけになり、しだいに荒廃し、無知蒙昧になっていくことだろう」(Ibid. S.3)の三カ所であり、いずれも付加的な言及でしかない。

(8) ヘーゲヴァルト演説については、親衛隊人種・植民本部について研究したHeinemann, Russe, *Stellung, deutsches Blut*が、入植政策、子どもの回収とドイツ化、レーベンスボルの活動とのかかわりなどを詳細に分析し、この演説が綱領的な意味をもっていたことを認めている。Padfield, Peter, *Himmler: Reichsführer-SS*, London: McMillan, 1990は、「ハイドリヒの葬儀のあとの一九四二年六月九日の演説にはスペースをさいているが、ヘーゲヴァルト演説は素通りしている。ヒムラーのイデオロギーを要素ごとにテーマ化したAckermann, Josef, *Heinrich Himmler als Ideologe*, Göttingen: Musterschmidt, 1970は「第6章「ヒムラーと東方」で、随所でこの演説から引用をして、この演説の重要性を間接的に証明しているが、著者の関心はこの演説そのものにはなく。Breitman, Richard, *The Architect of Genocide: Himmler and the Final Solution*, London: The Bodley Head, 1991は「ヒムラーのある演説については録音したもののまでも調べているが、ユダヤ人絶滅政策をテーマとしているせいか、ヘーゲヴァルト演説は射程外におかれている。お

なじく絶滅政策の研究者として知られるロンゲリヒは、Longerich, Peter, *Heinrich Himmler: Biographie*, München: Siedler 2008で「ヒムラーの伝記をまとめている。ロンゲリヒの中心的な考えは、ユダヤ人の殺害がシステム化されたのは一九四二年の春から初夏にかけての時期で、このころに親衛隊がかかわるさまざまな入植計画が一本化され、将来の大ドイツ帝国全域にそれを拡大しようと、決定的な一歩がふみだされたというものである。ロンゲリヒの関心が一九四二年の春から初夏にあるためか、同年九月のヘーゲヴァルト演説は、その個々の要素は各所に分散して扱われている。また「清潔」というテーマも注目されていないが、アジアや大ゲルマン帝国についてはテーマ化されていて、叙述は簡潔で、示唆に富む。わが国では、谷喬夫『ヒムラーとヒトラー 氷のユートピア』(講談社選書メチエ、二〇〇〇)が本格的な研究で、ヘーゲヴァルト演説にはふれていないが、それ以外の重要な演説を紹介しているほか、東方基本計画(Generalplan Ost)にも注目している点で重要である。

ヘーゲヴァルト入植との関連でこの演説にふれているのが、Lower, Wendy, *Nazi Empire-Building and the Holocaust in Ukraine*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2005で「この研究は「ナチスのウクライナ占領政策を、帝国建設と植民地主義という視角から扱おうとした点に特徴がある。ベラルーシについて研究したゲルラハは、

ドイツ軍兵士とロシア人女性との子どもをめぐる問題を「子どもにたいする戦争」としてテーマ化している。(Gerlach, Christian, *Kalkulierte Morde : die deutsche Wirtschaftsf- und Vernichtungspolitik in Weisßrußland 1941 bis 1944, Hamburg : Hamburger edition, 2000, S.1074-1092*) ヘーゲヴァルト演説と子どもへの拉致については、グイド・クノップ『ヒトラーの親衛隊』高木玲訳(原書房、二〇〇三)も一三二頁をめぐれている。

(6) *Der Dienstkalendar Heinrich Himmlers 1941/42*, Peter Witte; Michael Wildt; Martina Voigt; Dieter Pohl; Peter Klein; Christian Gerlach; Christoph Dieckmann; Andrej Angrick (Hg.), Hamburg: Hans Christians Verlag, 1999

(10) *Ibid.*, S.553, Anm.71

(11) *Ibid.*, S.563-568

(12) Jacobsen und Joehmann, S.1

(13) ヒュー・R・トレヴァーローバー編『ヒトラーの作

戦指令書』滝川義人訳(東洋書林、二〇〇〇)一九九頁

(14) ゲッベルスは、大戦中、ほぼ毎日、午前中に宣伝省幹部や国防軍統合司令部からの連絡将校などをあつめて「大臣会議」を開催している。その一九四二年九月一六日の会議で、ゲッベルスは当時の「新しいヨーロッパ」論議をきびしく批判し、ドイツ側から「新ヨーロッパ」というテーマについて騒ぎ立てることは、正しくないと述べている。

「世界は、われわれが物質的な利益をえることなしに、新

しいヨーロッパ実現のためにだけ戦っているとは思っていない。一般的には、ドイツ人はまだ理念のために戦っていると思われるが、ナチスについては、ナチスが石油と穀物と、それにわが民族の物質的状況の向上のために戦っていることを知っていて、夢を追いかけているのではなことを知っているからである。」Boelcke, Willi A (Hg.), *Wohl Ihr den totalen Krieg ? : die geheimen Goebbels-Konferenzen 1939-43*, Stuttgart : Pawlak, 1989, S. 281-282

(15) Picker, Henry, *Hitlers Tischgespräche im Führerhauptquartier*, Unveränd. Neuausg., Frankfurt/Main; Berlin: Ullstein, 1989, S.393-394 ヒトラーの「膨大な犠牲のことは、後の世代では、すぐに忘れさられる」という表現は、ヒムラーのヘーゲヴァルト演説にも見られる。ヒトラーとヒムラーの発言には、おたがいに引用しあっているようにみえる、よく似た言葉や言いまわしが目につく。

(16) Röhr, Werner u.a., (Hg.), *Die Festschriftliche Okkupationspolitik in Polen (1939-1945)*, Europa unterm Hakenkreuz Bd.2, Köln : Pahl-Rugenstein, 1989, S.227

(17) 陸軍参謀総長ハルデーは、ヒムラーの演説が行なわれた九月一六日の戦争日誌には、こう書いている。「南部では戦況はかわらず。スターリングラードでは前進。中央では、大きな出来事なし。第九軍は攻撃をはねかえす。北部では、マンシュタイン(ラドガ湖南部)が前進攻撃。「中略」総統のドン戦線への憂慮は相変わらず強い」(Halder,

Franz, bearbeitet von Hans-Adolf Jacobsen, *Der Rußlandfeldzug bis zum Marsch auf Stalingrad (22.6.1941-24.9.1942)*. Kriegstatabuch Bd.3, Stuttgart : W. Kohlhammer, 1964, S.523) 。

一九四二年九月一日ゲッベルスの大臣会議の記録によると、「ドイツのあらゆる事務所や組織からの報道によると、戦争がすぐに終わるといふ楽観的な希望はもはやこの夏のような広範囲なものではなくなっている。大臣はこうした事実を歓迎。昨年よりも、もっと精神的にいい状態で冬に入っていくだろう」(Boelcke, (Hg.), *Wolff-Ihr den totalen Krieg?*, S.277)とある。ゲッベルスの念頭には、「前年、楽観論が支配的だったために、ソ連軍の反撃にあい、「冬の危機」に陥ったことがある。

(18) Jacobsen und Jochmann, S.5-9

(19) *Ibid.*, S.7

(20) Mulligan, Timothy, *The politics of illusion and empire: German occupation policy in the Soviet Union, 1942-1943*, New York: Praeger Publisher, 1988, p.9

対ソ開戦前の一九四一年四月にヒムラーは、「対ソ戦終了後にオランダ人やフラマン人をソ連領土に入植させる計画をたて、その準備にあたらせた。しかし五月には「東方への入植希望者はきわめて少ない」との報告があがってきている。たぶん Kay, Alex J., *Exploitation, Resentment, Mass Murder: Political and Economic Planning for German*

Occupation Policy in the Soviet Union, 1940-1941, New York : Berghahn, 2006, p.99」のほか、「一九四二年四月二十七日の東方基本計画の鑑定書のなかでも、「東方入植をいやがる」傾向が指摘されており、交通の便を改善することなどの対策が提案されている (Heiber, Helmut, *Generalplan Ost, in: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, Jg.6 (1958), H.3, S.320)。

(21) Jacobsen und Jochmann, S.1

(22) *Ibid.*, S.2

(23) *Ibid.*, S.2

(24) *Ibid.*, S.6

(25) ドイツがポーランドから奪って、ドイツに併合したヴァルテラントでは、プールや公衆浴場の利用時間は午後、週に一度か二度に制限された。これは「不潔なポーランド人」という常套句を維持し、清潔をドイツ人の特権とするためであったとされる (Harten, Hans-Christian, *De-Kulturration und Germanisierung: Die nationalsozialistische Rassen- und Erziehungspolitik in Polen 1939-1945*, Frankfurt/Main: Campus, 1996, S.97)。

(26) *Himmler: Geheimreden 1933 bis 1945*, S.49 ライヒとは、「中欧におけるドイツ人の国」という意味で、ナチ「第三帝国」は第三のライヒという意味で、ヴァイマル共和国もライヒであるが、本稿では以後、大ゲルマン・ライヒを大ゲルマン帝国と訳しておくことにする。アッカーマンによれば、「ヒムラーが最初に「大ゲルマン帝国」の建設

を口にしたのはこの一九三八年一月八日の演説であるとされる (Ackermann, *Heinrich Himmler als Ideologe*, S.180)

大ゲルマン帝国については、Loock, Hans-Dietrich, Zur „Grossgermanischen Politik“ des Dritten Reiches, in: *YfZ*, 8 Jg. (1960), H.1, S.38-63 がよくまとまっているが、この論文では、大ゲルマン政策の対象は北欧、北西欧諸国に限定されている、ヒムラーの一九四二年九月一六日演説はまったく注目されていない。ましてや、東方、ロシアを包摂する構想としては、とらえられていない。ゲルマン帝国構想をナチズムの広域構想、新体制とのかわりてとらえているものとして、以下のものがある。Evert, Jürgen, *Mitteluropa! : Deutsche Pläne zur europäischen Neuordnung (1918-1945)*, Stuttgart : Steiner, 1999 ; Gruchmann, Lothar, *Nationalsozialistische Großraumordnung : die Konstruktion einer "deutschen Monroe-Doktrin"*, Stuttgart : Deutsche Verlags-Anstalt, 1962 ; Mai, Uwe, "Rasse und Raum" : *Agrarpolitik, Sozial- und Raumplanung im NS-Staat*, Paderborn : Schöningh, 2002

(27) Himmler: *Geheimreden 1933 bis 1945*, S.37

(28) 芝健介『武装親衛隊とジエノサイド 暴力装置のメタルモルフオーゼ』(有志舎、二〇〇八) 四七頁

(29) Himmler: *Geheimreden 1933 bis 1945*, S.37-38 ちなみに引用の前半部分は、ユダヤ人絶滅を予言したとされるヒトラーの有名な一九三九年一月三〇日の演説に酷似してい

る。

(30) 史料としては、Himmler: *Geheimreden 1933 bis 1945* と、『ニェルンベルク裁判史料集』(IMT)、『現代史季報』(YfZ)に掲載されているヒムラーの演説で、全文がわかるものを選んで用いたので、網羅的なものではない。

一九三八年一月八日の演説 Heinrich Himmler: *Geheimreden 1933 bis 1945*, S.25-49

一九四〇年二月二九日の演説 Heinrich Himmler: *Geheimreden 1933 bis 1945*, S.115-144

一九四〇年九月七日の演説 Nbg.Dok. 1918-PS IMT, Bd. XXIX, S.98-110

一九四二年六月九日の演説 Heinrich Himmler: *Geheimreden 1933 bis 1945*, S.146-161

一九四二年九月一六日の演説 Jacobsen und Jochmann, S.1-13

一九四三年一月三〇日の演説 YfZ, Jg.8 (1990), H.2, 337-348.

一九四三年一〇月四日の演説 Nbg.Dok. 1919-PS IMT, Bd. XXIX, S.110-173

一九四三年一〇月六日の演説 Heinrich Himmler: *Geheimreden 1933 bis 1945*, S.162-183

一九四四年七月二六日の演説 Heinrich Himmler: *Geheimreden 1933 bis 1945*, S.215-237

一九四四年八月三日の演説 YfZ, Jg.1 (1953), H.4, S. 357-394

(31) Nbg.Dok. 1918-PS IMT, Bd. XXIX, S.108

(32) *Ibid.*, S.108

- (33) Breiman, *The Architect of Genocide*, p.242
- (34) Nbg.Dok. 1919-PS. I.MT. Bd.XXIX, S.137
- (35) *Ibid.*, S.136
- (36) Himmler: *Geheimreden 1933 bis 1945*, S.236
- (37) *Ibid.*, S.236
- (38) Speer, Albert, *Spandauer Tagebuch*, Frankfurt/Main, Berlin, Wien: Propyläen, 1975, S.85
- (39) *Ibid.*, S.86
- (40) ドイツの人口一〇〇〇人あたりの出生数は、一九〇二年の三五・一を最後に減少をうつけ、一九三二年には一五・一、ナチスが政権についた一九三三年には一四・一まで落ちこんだが、一九三八年には一九・六まで回復してゐる。一九〇二年の数字は、Hohorst/Kocka/Ritter, *Sozialgeschichtliches Arbeitsbuch*, München: Beck, 1975, S.29, 一九三一年以降の数字は、Pezina/Abelhauser/Fans, *Sozialgeschichtliches Arbeitsbuch III*, München: Beck, 1978, S.32。
- (41) 一九四二年八月一四日、キエフ視察から帰還したヒムラーは、カフカースやクリミアにもゴート人の子孫がいるから、彼らを探し出し、つれてきて、ドイツ化すると述べ、さらに戦争が終わったら、親衛隊の指導者を各国に送り、その地の民族のなかから良き血をもつ子どもたちをつれてくるつもりだと語つてゐる。(Ackermann, *Heinrich Himmler als Ideologe*, Dokument Nr.26, S.273)
- (42) Speer, *Spandauer Tagebuch*, S.87-89 なお、エルザス・
- ロートリンゲン人については何にも思わないというのは、一八七〇年の独仏戦争で彼らがドイツに復帰したときに、フランス化しているとして第二級市民としてあつかわれたことを指してゐる。
- (43) Hitler, *Adolf, Sämtliche Aufzeichnungen: 1905-1924*, Hrsg. von Eberhard Jäckel zusammen mit Axel Kuhn, Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1980 所収の史料「一七八番（一九二二年一月一日の『フェルキシヤール・ベオバハター』紙の論説）」と「三九二番（一九二二年七月二一日のメモ）」である。
- (44) 詳しくは、Loock, Zur „Grossgermanischen Politik“ des Dritten Reiches を参照の「J」。
- (45) Picker, *Hitlers Tischgespräche* S.452
- (46) Himmler: *Geheimreden 1933 bis 1945*, S.125
- (47) Jacobsen und Jochmann, S.4
- (48) Thum, Gregor, *Mythische Landschaften Das Bild vom „deutschen Osten“ und die Zäsuren des 20. Jahrhunderts*, in: Gregor Thum (Hg.), *Tranmland Osten*, Göttingen: Vandenhoeck Ruprecht, 2006, S.183f.
- (49) ナチ人種理論については、原田一美「ハンス・F・K・ギンターの人種論」『大阪産業大学人間環境論集』九(二〇一〇)一五七〜一七五頁、同「ナチズムと人種主義」考(一):二〇世紀初頭までの系譜」『大阪産業大学人間環境論集』五(二〇〇六)五五〜七五頁、同「黒い

汚辱』キャンペーン：『ナチズムと人種主義』考(二二)』
 『大阪産業大学人間環境論集』六(二〇〇七)一―二二頁
 がある。単行本では、バーリー、マイケル／ヴィッパーマ
 ン、ヴォルフガング『人種主義国家ドイツ一九三三―四
 五』柴田敬二訳(刀水書房、二〇〇一)のほか、Hutton,
 Christopher M., *Race and the Third Reich: linguistics, racial
 anthropology and genetics in the dialectic of Volk*. Cambridge:
 Polity Press, 2005 は「アーリア人種」という用語がナチ
 ス・ドイツでいかに中心的概念として用いられようとも、
 それが厳密な意味での人種として使用することには学界か
 らは支持がえられなかったし、当局も一九三五年までには
 は、それを認めるようになったことを指摘している。
 Majer, Diemut, "Fremdvölkische" im Dritten Reich: ein Beitrag
 zur nationalsozialistischen Rechtssetzung und Rechtspraxis in
 Verwaltung und Justiz unter besonderer Berücksichtigung der
 eingegliederten Ostgebiete und des Generalgouvernements,
 Boppard am Rhein: Boldt, 1981 も同様の指摘をしている。

(50) Jacobsen und Jochmann, S.2

(51) *Ibid.*, S.3 ヒトラーは、一九四二年七月二八日の総統
 命令「占領地におけるドイツ国防軍関係者の子ども世話
 に関する命令」で、国防軍関係者とノルウェーやオランダ
 の「ゲルマン系」女性との子どもについては、母親の申請
 があれば特別な世話を手配するとした(Domarus, Max,
Hitler: Reden und Proklamationen 1932-1945, Bd.2, Neustadt

a.d. Aisch: Verlagsdruckerei Schmid, 1963, S. 1901) なお、ヒ
 トラーは、国防軍関係者がポーランド人女性と関係するこ
 とを禁止、違反すれば処罰するとしている。

ゲルラハによれば、実際には東方占領地域でのドイツ人
 兵士の子どもは、ウクライナで約一万人、ベラルーシで約
 五〇〇人という数字をあげている(Gelach, *Kalkulierte
 Morde*, S. 1081)。西方をふくめた全体の数については、
 Heinemann, *Rasse, Siedlung, deutsches Blut*, S.530 Anm.179を
 参照のこと。

(52) Jacobsen und Jochmann, S.4 母親への手当については、
 本稿の史料一に反映されている。

(53) *Ibid.*, S.4-5

(54) たとえばベラルーシでは、戦前には学校が一万一八四
 四校あったのが、ドイツ占領下の一九四二年八月にはわず
 か四〇〇校に減っている。参照 Gelach, *Kalkulierte
 Morde*, S.1077

(55) 有名なのが一九四四年に「干草作戦」の暗号名でベラ
 ルーシを中心に展開されたものがある。干草の上で寝る浮
 浪者や孤児にちなんだ暗号で、一〇歳から一四歳の子ども
 を、三万人から五万人、ドイツの軍需工場に動員しようと
 するものであった。ゲルラハによれば、これはバルチザン
 対策だけでなく、ロシアの人口基盤への打撃を狙ったもの
 で、子どもたちは「特別な絶滅作戦」の対象にされたもの
 とされる。Gelach, *Kalkulierte Morde*, S.1075, 1087

- (56) Röhr, Werner u.a., (Hg.), *Die Faschistische Okkupationspolitik in Polen*, S.144
- (57) Ackermann, *Heinrich Himmler als Ideologe*, Dokument Nr.37, 299
- アリーとハイムは、ドイツ化のための基準として、たんに人種的な出自だけでなく、「社会的上昇意欲」「適応能力」が重視されていることを強調して、ヒムラーのこの覚書を引用しているが、()に訳出した部分はカットされてゐる。参照: Götz Aly, Susanne Heim, *Vordenker der Vernichtung. Auschwitz und die deutschen Pläne für eine neue europäische Ordnung*, Frankfurt/Main: Fischer-Taschenbuch Verlag, 1993, S.139-142
- (58) Ackermann, *Heinrich Himmler als Ideologe*, Dokument Nr.37, 299
- (59) Longenich, *Heinrich Himmler*, S.616
- (60) Heinemann, *Rasse, Siedlung, deutsches Blut*, S.521f.
- (61) 同じ一族なのに、居住する大管区によつては、ドイツ人と認められたケースと、ポーランド人として追放されたケースがあった。参照: Rees, Laurence, *Die Nazis. Eine Warnung der Geschichte*, München; Zürich: Diana Verlag, 1997, S.163f.
- (62) Heinemann, *Rasse, Siedlung, deutsches Blut*, S.515f.
- (63) Röhr, Werner u.a., (Hg.), *Die Faschistische Okkupationspolitik in Polen*, S.65 拙稿「クルコフスキの『占領時代の日記』を読む」『人文科学研究』(お茶の水女子大学)三(二〇〇七)四一〜五四頁を参照
- (64) Heinemann, *Rasse, Siedlung, deutsches Blut*, S.522f.
- (65) *Ibid.*, S.523
- (66) *Ibid.*, S.508f.
- (67) 参照: クレイ, キャトリン/リーブマン, マイケル『ナチスドイツ支配民族創出計画』柴崎昭則訳(現代書館, 一九九七)五九頁
- (68) キュンターのヨーロッパ内部の人種区分については、時期によつてことなっているが、親衛隊の入隊基準にある北方系、ファールレン系、アルプス系、ディナール系、地中海系に東バルト系をくわえた六つの人種が知られている。前掲の注四九にあげた原田一美「ハンス・F・K・キュンターの人種論」と Hutton, *Race and the Third Reich* を参照された。
- (69) *Himmler: Geheimreden 1933 bis 1945*, S.54
- (70) Jacobsen und Lochmann, S.12
- (71) *Ibid.*, S.13
- (72) Heinemann, *Rasse, Siedlung, deutsches Blut*, S.533
- (73) Heiber, *Generalplan Ost*, in: *1/2*, Jg.6 (1958), H.3, S. 281-325
- (74) *Ibid.*, S.313
- (75) *Ibid.*, S.312
- (76) *Ibid.*, S.315

(77) *Ibid.*, S.316

(78) 二〇世紀ドイツの人口問題については、川越修「社会国家の生成—二〇世紀社会とナチズム」(岩波書店、二〇〇四)がある。このほか、小玉亮子「少子化、ナショナリズム、ジェンダー」『比較家族史研究』第二四号(二〇〇九)八二—九五頁、拙稿「二十世紀とはどういう時代であったのか」『東海史学』三四号(二〇〇〇)一一—二八頁を参照。なお筆者は二〇〇二年七月のドイツ現代史学会での報告「徴候としての二〇世紀」で、人口が急激に増加するという意味での人口革命と、自然災害や流行病などが原因ではなく、子どもの数がへり、人口が縮減していくという意味での人口革命、この二つの人口革命が同時に進行する時代という意味で「二重人口革命の時代」というコンセプトを提示したことがある。ナチズムはこの、出生率の低下と人口増大の同時進行という事態に対処しようとしたものにとらえることができる。その意味でナチズムは、二一世紀に本格化する二重人口革命の時代を先取りしたものと見え⁸⁹。

(79) *Himmler: Geheimreden 1933 bis 1945*, S.149

(80) ユダヤ人移送について最新の研究としては、木村靖二「第二次大戦初期におけるナチス・ドイツのユダヤ人強制移送政策」『立正大学文学部論叢』一三一(二〇一〇年)二七—四九頁がある。独ソ戦とホロコーストについては、永岑三千輝『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆』一

九四—一九四二(同文館、一九九四)、同著「独ソ戦とホロコースト」(日本経済評論社、二〇〇一)、同著「ホロコーストの力学—独ソ戦・世界大戦・総力戦の弁証法—」(青木書店、二〇〇三)がある。

(81) 前出の Götz Aly, Susanne Heim, *Verdenker der Vernichtung* のほか、ユダヤ人を移送し殺害することで、その資産をドイツ国民の福利やドイツ軍がハンガリーなどに駐留する経費にあてようとしたとする Aly, Götz, *Hitlers Volkstaat: Raub, Rassenkrieg und nationaler Sozialismus*, Frankfurt/Main: S. Fischer, 2005 や「食料という要因を重視するゲルラハの Gerlach, Christian, *Krieg, Ernährung, Völkermord: Forschungen zur deutschen Vernichtungspolitik im Zweiten Weltkrieg*, Hamburg: Hamburger Edition, 1998 や前出の Gerlach, *Kalkulierte Morde*, などもあ⁹⁰。

(82) Longenich, Peter, *The Unwritten Order: Hitler's Role in the Final Solution*, Stroud: Tempus Pub Ltd, 2nd Revised edition, 2005, pp.196-197

(83) Jacobsen und Jochmann, S.3

(84) *Ibid.*, S.4

(85) この文言が具体的にはなにを指しているかは不明である。しかし、当時、問題になっていたのは、「疎開」を猶予されている軍需産業や国防軍関係の工場で働くユダヤ人の問題であった。すでにヒトラーは、ベルリンの大管区指導者を兼任するゲッベルスなどの要請により、一九四二年

六月に軍需大臣シュペーアにたいして、ドイツ本国の軍需工場で雇用されているユダヤ人は外国人労働者で代替しなければならぬと指令していた (Boetcke, Willi A. (Hg.), *Deutschlands Rüstung im Zweiten Weltkrieg. : Hitlers Konferenzen mit Albert Speer 1942-1945*, Frankfurt/Main : Athenäum, 1969, S.189)。一九四二年九月五日には、国防軍統合司令部長官カイテルも、軍需産業で働くユダヤ人をポーランド人でおきかえるよう指令をだしたが、軍内部から反対がおきていた (Madajczyk, Czeslaw, *Hitler's Direct Influence on Decisions Affecting Jews during World War II*, in: *Yad Vashem Studies*, 20(1990), p.60)。こうしたなか一九四二年九月二〇日～二二日の軍需会議で、ヒトラーは総督府のユダヤ人熟練労働者は当面そのままにするというザウケルの提案に同意したものの、「ドイツの軍需工場からユダヤ人を運び出すことの重要性を再度強調」している (Boetcke, *ibid.*, S.189)。九月二二日のヒトラーとヒムラーの協議の内容については分らないが、ユダヤ人軍需労働者の排除というヒトラーの強い意志は、一九四三年一月二七日に総督府でヒトラーの命令が実行に移されていることから確認できる。